



# HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	維新の変革と幕臣の系譜：改革派勢力を中心に（7・完） ー国家形成と忠誠の転移相克ー
Author(s)	菊地, 久; KIKUCHI, Hisashi
Citation	北大法学論集, 33(5), 1-51
Issue Date	1983-03-26
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/16415">https://hdl.handle.net/2115/16415</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	33(5)_p1-51.pdf



維新の変革と幕臣の系譜…改革派勢力を中心に（七・完）

——国家形成と忠誠の転移相克——

菊 地 久

△目 次▽

はじめに…問題の発端と所在

第一章 幕府における改革派勢力の形成

——幕藩体制秩序と忠誠、その背反の萌

第一節 嘉永末・安政年間における幕政改革（二九卷三・四号）

第二節 改革派勢力における体制秩序と忠誠（三〇卷四号・三一卷一号）

第二章 幕府における改革派勢力の拡大とその分裂

——国家の発見・個人の析出と忠誠の転移相克

第一節 万延から慶応へ、そして「戊辰の瓦解」（三一卷二号）

第二節 改革派勢力における国家の発見・個人の析出（三二卷一号）

## 第三章 明治國家の形成と幕府改革派の後身グループ

——封建的忠誠の解体と帰一、その諸相

## 第一節 没落と社会への進出（三二卷三号）

## 第二節 改革派後身の様々な歩み

おわりに（以上本号）

## 第二節 改革派後身の様々な歩み

幕末における忠誠観念の変容は、 $\wedge$ 國家の発見とその価値的上昇、旧体制秩序からの個人の析出、かかる両極化の中での新たな政治主体の誕生 $\vee$ と共にあった。こうした展開を體現したのが、その後維新官僚への翻身を見せた政争過程での勝利者——討幕派の系譜であったことは勿論である。だが、敗北者が粹外にあったかと言えば、決してそうではない。事の進行は、政治的な敵対関係を或る程度横断する広がりを示し、「瓦解」を強いられた幕府に目を遣るなら、その改革派グループにも鮮明な形をとっていた。

維新の政変を経て後、旧幕臣は、改革派の残存分子を中心に際立った社会進出を見せる。政治的敗北の打撃を躲して立ち上がるそのしなやかさは、明らかに $\wedge$ 國家の発見 $\vee$ や $\wedge$ 個人の析出 $\vee$ の進行に支えられていた。伝統的観念の克服やそこからの超脱を伴ったその展開が、新たな知識や技術の修得といった社会的優位の条件と相俟って、次の時代への積極的な対応を促したのである。

社会進出を遂げた旧幕臣の内的な足跡は、ただし、単線的なものではない。旧敵の領導する新國家を「戦敗者」とし

て生きる現実が、「忠義」「奉公」を核とする旧来の観念に新たな意味を滯びさせていた。無論、大筋を言えば、旧来の観念は引き続きその拘束力を失いつつあった。だが、そうしたプロセスは、「戦勝者」における克服や超脱の過程に比して、遙かに振幅が大きく、かつ又屈折に満ちたものであった。

前節では、明治と年号が改まって後の旧幕臣の変転を追ひ、昔時の改革派を中心とする社会進出の動きを確認した。本節では、その改革派後身に的を絞り、彼らのこうした内面に分け入ろうと思う。△国家の発見▽や△個人の析出▽に伴う忠誠観念の変容が、「戦敗者」においてどのような様相を示したのか。議論は、かかる間に答える形で進み、權力の側からする△忠誠の帰一▽との絡みで終る。比較の手法が採られることは、従来と変りない。

△国家の発見とその価値的上昇▽は、国家に対する忠誠の内的確立に帰す。このことは、武士にとって、従来の「忠義」「奉公」観念の二重三重の克服を意味した。「忠義」「奉公」は、「恩」に基礎づけられてそれが実感される範囲に活きた意味を持ち、「主君」に対するパーソナルな献身を趣意として、総じて帰属の主従集団の利益追求を強いるものであった。だが、国家に対する忠誠は、これと大いに異なる。それは、「恩」を感受し得る域を越えて統一体として国家という観念の対象への挺身を求め、その極において帰属集団の利害を度外視せしめるものであった。かゝる当為を自らの準則とするためには、幾重にもわたる内的転換を経なければならなかったろう。

「忠義」「奉公」観念の克服が、儒教的な政治規範や「一姓歴々」の人格的權威を奉じて為されたことは、既に見た。これらの政治規範や人格的權威は、統一体としての国家を意味的に代位し、漸次それへの忠誠に道を拓いていった。人

格的權威の政治規範被拘束性が承認される中で「神州闔国」維持の爲の八抛国家（藩）√が語られる時、事は先端部分において一応の結了を示す。

ところで、こうしたプロセスは、「忠義」「奉公」觀念の克服を告げこそすれ、必ずしもその払拭を意味しない。帰属の主従集団に対する利害關心は、それが「神州闔国」維持の趣意に抵触しない限度においてなお存続する。又、その余地がない場合でも、「主君」や「御家」への思い入れは、私的な生活領域や心情世界に様々な形で尾を引く。維新以降旧秩序の破壊が進む中であつては、なにがしかの逡巡を伴う形でのこの種の残響をあちらこちらに見ることが出来る。

破壊の先頭に立った新たな支配者も、決して例外ではない。版籍奉還の間際、大久保利通は、国元薩摩での紛糾により主家筋からの帰藩命令に接して、岩倉具視に次のように「愁訴」していた。「朝廷諸事御変革」の折柄、自分も「微力ながら十分勉勵盡力」のつもりであつたが、「退て国家ヲ願候得は、此（薩摩）動静ニ依ても關係する処亦大にして朝廷之本体ニ相拘り、且私情ヲ以論候得は、累代臣子之情義黙止難く、是以度外ニ視る事能わず。進退困却茫然たる次第ニ御座候」。『累代臣子之情義』に應ずることは「私情」にすぎず、「公」はあくまでも「朝廷」を中心とする「国家」にある。だが、「私情」にそつた藩へのかゝわりが、「公」たる「国家」の存立に帰してこれを損なわれない限り、「私情」はなお「私情」として温存され、場合によってはなにがしかの困惑と逡巡を齎すのである。

大久保は、程なくして「小臣等内実は旧藩論彼是唱へられ候義も之有り候へ共、只今日ハ其誼を正ふして其利を謀らず、其道を明らかにして其功を謀らざる之古言ニ安着仕候外御座無く候」と語り、その種の「私情」をも意識的に切り棄てていった。廃藩置県や秩禄処分が待ち構える中であつては、こうした徹底が不可欠であつたろう。だが、例えば木戸孝允は、大久保の旧藩への肩入れをしばしば「非難したにも拘らず、その閉じた心情世界において依然『累代臣子之情義』を保持し続けていた。『皇国維持の目的』を説く彼は、半面、版籍奉還に際して「此千載の大義また我公をし天下に立

んと欲」するような所があり、<sup>(3)</sup> 廃藩置県を迎えてその詔勅拝受の儀式に旧主の姿を認めては、「山口知事公には五十六藩中に在て齊く平伏拝聴、我海岳も及ばざる高恩を蒙りし君也、感情胸塞がり涕涙下つるを知らず」と記すのである。<sup>(4)</sup> 事情は、西郷隆盛においても変りない。彼は維新後もなお「泉下の君」島津斉彬の「御鴻恩」を忘れかねており、さらに又主筋の久光との間の「君臣」の「義」に悩まされていた。<sup>(5)</sup> 捉われる所は、むしろ遙かに強かったと言える。

新たに枢機に昇った者達は、そのすべてが伝統的な忠誠観念の克服を経ている訳ではない。討幕に到る歩みにも或る程度のバラツキがあり、それは新政権の初期において一種の分派動向につながっていた。一方には、「累代臣子之情義」を「私情」と見ず、よしんば「私情」と見てもなおこれに拘束される者が少なくなかった。大隈重信の回顧にあるように、「一片の私情は彼等を拘束して断然其至公至平の見解（「封建の制度」の「廃滅」）を唱論決行するに忍びざらしむるものありし。否な寧ろ唱論決行する能はざるものありし」という光景が広がっていたのである。とは言え、旧秩序破壊への急進的な動きがなかったのではない。先立つ政争過程での制度流潰が、「忠義」「奉公」観念の空洞化と共にあったことを忘れてはなるまい。こうした展開に身を置いた部分は、後に述べるように、一部が新権力の組織化からも逸脱する傾向を示しながら、他の一部はその権力の内部にあって根本的且性急な変革に向かった。従って、他方では、「累代臣子之情義」の忘却と言うに近い内面性を梃子として、「皇国維持の目的」に猛進する者もいたのである。

強いて単純化するなら、大久保や木戸、或は西郷といったトップ・リーダーは、個人差は否定し難いものの、総じてこうした分裂状況の中間域に立っていた。そして、その変革のイニシアチヴは、急進分子を庇護もしくは制御しつつ、彼らの勢いに乗って守旧ないし躊躇の部分を押し切るという形で発揮された。歩みは、決して平坦なものではない。「主家を滅する者」といった類の非難に対し、これを了解し得る「私情」をひきずりながら耐えなければならなかった。しかも、事の推進は、立場を異にする昔時の「同志」の切り棄てを伴うものであった。木戸晩年の鬱屈や西郷の士族反

乱への加担、さらに大久保の意識的な「私情」排除は、こうした困難に対して彼らが彼らなりに出した三様の答であつたらう。

ところで、「忠義」「奉公」観念の残響は、維新の指導者にのみその余韻を引いていたのではない。「私情」を「私情」として抱懐し続けるブルールリズムは、旧秩序破壊の進行と共にそれなりの末広がりを示し、しかも個々の置かれた状況に応じて様々な内的機能を果していった。中でも興味深いのは、維新の敗北者、殊に幕府改革派後身における展開である。

「賊徒」「戦敗者」たる旧幕臣にあって、旧来の忠誠観念は、劣位の状況を生き抜く支えとなっていた。無論、彼らのすべてにおいてそうであると言うのではない。改革派の系譜に目を遣るなら、一方には忠誠観念の空洞化が鮮明であり、頼むべきは身につけた新たな知識や技術といった傾向が浮び上がっていた。だが、他方では、知識や技術の修得にも拘らず、しかも国家の存立に主要な関心を移した場合ですら、「主君」や「御家」への「私情」が独自の継続を見せていた。一方においては自我の充足に帰する形で、他方ではその域にとどまらず、旧帰属集団の社会的復権を志向せしめる形をとって、である。

社会的復権の志向は、勝海舟にその典型を見ることが出来る。明治の変動が一サイクルを経た三十一年、最後の将軍徳川慶喜の名誉回復が、彼の皇居参内・天皇拝謁の形をとって行なわれた。折から、勝が「我が苦心三十年、少しく貫く処あるか」と記し、「おれの役目も、もうこれで終わったのだから」と述べていたことは、まさに象徴的である。

既に見た通り、勝においては「邦家(国家)」の存立こそが第一義であった。「皇国土崩」の事態を回避するべく、恭順論を採って動かなかつた「瓦解」時の対応が、まさにそのことを告げている。以降の「封建の制度の廃滅」に対して

も、彼は何ら抵抗や逡巡の風を示さず、却ってその遂行者たる新政府に向って「今にしてその護国に害ある、よろしくその制を改めむに何の害をか生ぜむ」と論じ込む。伝統的な忠誠観念、彼の言葉を借りて言えば「御家の為（9）に小忠（10）」の克服は、明らかである。

とは言え、忠誠観念の克服がその払拭を意味しなかったこと、勝も他の例に漏れない。「瓦解」時の奔走も徳川家臣の屬性を離れてあった訳ではなく、以下の「私情」をもう一方の梃子としていた。「如何ぞ我が徳川氏の社稷をして全うするを得べけむ哉。その力足らざるを知りて退かざるは、頗る愚に近しといえども、思うに、我が徳川氏歴代溥恩の名族、近日の大変に遭うて、その方向を失し、一も大義に苦慮尽力して休む無きは、独りその臣下の辱にあらず、我が君家の大辱、後世是を如何といわむ。たとえ身を八裂し、首を溝壑に擲たるも、また顧みるに暇無きものあり」<sup>（11）</sup>。この種の想念は、以後もほと一貫する。

だが、その継続の在り方は、必ずしも他の例に重ならない。「戦勝者」の場合と異なり、意識的な切り棄てがなかったのは勿論、閉じた心情世界に押し込められることもなかった。それだけではない。後に見るような旧幕臣におけるもう一方の展開、一身の去就を左右して自我の充足に帰するそれとも、はつきり違っていた。伝統的な忠誠観念の継続は、勝にあってなお「君家」とその家臣団残流のための利益調達を促すものであった。復権のための「おれの役目」が語られる所以である。

勝の後半生は、自ら課した「役目」の遂行を示している。既に触れたように、彼は、徳川方の降伏を取り仕切った功績によって比較的早い時期から新政府高位への勧誘を受け、明治五年から八年にかけては、海軍大輔・海軍卿兼参議の要職を歴任した。こうした官界への参入が、「邦家（国家）」存立の関心に発する新政府への協力であったことは言うまでもない。だが、出仕が求められる中で徳川家からの除籍を願った際、その『日記』に「我微意あれど、知る人無し」

と意味深長な記載を行なっていたことは、別な角度から注目されて良い。官界への参入は、その高い地位を踏えた「戦敗者」復権の意欲にも支えられていた。<sup>(13)</sup> 廃藩置県によって静岡の徳川藩が解体する中、彼は、一方において旧主家の家政管理や没落家臣の救済をはかりながら、<sup>(14)</sup> 他方では、以下の如く、同藩有為の士の新政府出仕を仲介していった。「藤沢長太郎（次謙）、川村氏（純雄・海軍少輔）へ引合す／藤沢、中議生拜命の礼」<sup>(15)</sup>「吉井殿（友実・宮内少輔）へ行き、（大久保）一翁の事御内話。大久保殿（利通）へ行き種々談話／一翁へ出身の談す」<sup>(16)</sup>「尺振八方へ行く。出身の事談す／井上大蔵大輔（鑿）へ横須賀并びに尺の事相談」<sup>(17)</sup>等々。こうした仲介努力は、新政府へのさらなる協力であると同時に、その形をとった旧幕臣復権の一作業であり、明治一〇年代にかけ、前節で述べたような藩閥主流を傍から見ても対抗派閥形成につながってゆく。

官を辞して後もなおそれなりの影響力を持ち続けた勝は、かく新権力の内部に失地回復の楔を打ち込みながら、次にはこれを利して「君家」の名誉回復に乗り出していった。「山岡氏（鉄舟）、伊藤（博文）へ代々將軍廟所の儀申立ての趣意談じ、同人へ委細御内話の事頼む」<sup>(18)</sup>。天皇の徳川家行幸の露払い的な意味を持った日光・久能両山將軍廟に対する宮内省からの一万五千円下賜（共に明治二〇年）は、それに数年先立つこうした内工作を経てのものであった。又、官費による一連の幕府事蹟集成『海軍歴史』（海軍省出版）『陸軍歴史』（陸軍省同上）『開国起源』（宮内省同上）につながつた『吹塵録』の編纂（明治二〇年、同二三年大蔵省出版）は、以下の経緯をその発端としていた。「吉田市十郎、我が計算書（幕府財政書）、松方（正義）へ示す処、感心、何卒整頓いたし呉れ候様口上。且、入費は大蔵省よりいくれにても差し出すべき旨なり」<sup>(19)</sup>。勝は、こうした活動の終幕近くに、徳川慶喜の皇居参内を迎えたのである。

復権を志向した勝の歩みは、権力への接近をその道筋としたが、そこに種々の困難が伏在していたことは勿論である。歩みは、何よりもまず「戦勝者」の猜疑に耐え、これを巧みに躲しながらのものでなければならなかった。彼ら

は、勝を旧敵に向ける猜疑の例外とはしなかった。その政府への協力が、旧幕臣復権の手配り、殊にそれへの官職配分を伴っていたのであれば、なおさらである。事は、西南戦争直後の警視庁捜査に象徴される。だが、これに加えては、同じ「戦敗者」の反感にも耐えなければならなかった。権力接近の呈状は、当初、旧幕臣の過半に、そして後に到ってもなお一部に根強く、「薩長両家へ相通い、御家の為、不利を企て候哉」「曩きの敵国の士人と並立て得々名利の地位に居る」等々の疑惑や非難を促していたのである。

勝は、こうした挾撃の困難を潜り抜け、「国家」存立の根本に背くことなくその「役目」を果していった。人に数倍する用心深さと忍耐力とを以って、そしておそらくは、孤独という無形の代価を支払いながら、である。彼は、天皇の徳川家行幸に半年先立って伯爵に叙せられ、権力からの存在承認を得る。そして、その前後から、便宜依頼の旧幕臣に限らず、多数の来客に取り囲まれることとなる。しかし、支払った代価の大きさ故にであろう、そうした中において彼の目は皮肉気であり、心は一抹の寂寥を抱え込んでいる。「時ぞとて おどろの中に さく梅の 清きは人の ころこにも似ず」「咲きいでし 雲の上野の 山ざくら むかしの憂を おもひこそすれ」「人知らぬ 心の中の わびしさも花のもとには 消えやしぬらむ」。これらの教句は、その例証と言えよう。勝は、事成就の自足の陰に思いの外根深い屈託を引きずっていたのである。

ところで、旧幕臣にあつては、「累代臣子之情義」に応ずる心性は個々の道義的実存に係わるものとしても、その継続を見せていた。「御家」復権の歩みが有効な手立を求めて権力接近の外観を呈したとするなら、それとは対照的な在野の半生を伴って、である。

「戊辰の瓦解」時、勝は総督府に対して徳川家に随従する家臣達の知行地差し戻しを求め、その建言の中で次のよう

に述べていた。「徳川家祖宗以来歴代君臣の義理を守り、主家と存亡を共に仕り度き所存の者共は、般の頑民と同日の論にて、その情実憐れむべき者にこれあり、此輩天下に在りては、頑民にこれあるべく候え共、徳川氏の為には忠臣とも申すべき者にて、既にその主家に忠ある上は、他日皇国の御為に忠勤抽んずべき者に相違これあるまじくと存じ奉り候」。随従家臣擁護のこの主張は、同じ「徳川家譜代恩顧の大名旗本」でありながら「朝命遵奉」を以て「主家」に弓引く者達への非難を伴っており、後者については、「その心底を尋ね候えば、畢竟唯利のみ是を視、歴世渥恩の主家に背き、人倫の常綱を相失い候輩もこれあるべきか。若し果して然らむには、如何ぞ皇国の御為に忠誠抽んずべき道理これあるまじく哉」とする<sup>(26)</sup>。こうした対の議論から明らかのように、勝は、「主家」の逆境に殉ずる「忠臣」に「般の頑民」に通じる至純一徹を認め、その道義性に「皇国」にとつての真の頼り甲斐を見出していた。

「主家に忠」である者がその「頑民」的形狀において告げるのは、——オールコックの日本人評を借りて言えば——「努力の真実の動機として抱いている義務観」の強固さであり、「俗世の利益を所有すること、あるいはあらゆる所有物のうちでもっとも大切な生命そのものを所有すること——こういうことよりも高くそれを超えた何物かを見ている」<sup>(28)</sup>。高度の精神性である。時に「人は精神が第一」と語つてその意義を知る勝は、「皇国の御為に忠謹」もこうした精神性に支えられなければならぬとした。だとすれば、「頑民にこれあるべく」が他人事として終らなかつたのも当然と言えよう。内乱を経て暫くの間、彼は、自身の事としても「徳川氏の逸民を以て武門に携わり申すまじく」<sup>(30)</sup>。「般の祖民は周に仕えず」等々と語っていた。半ば宿命づけられた二重の忠誠に対し、在るべき「精神」の提示を以てそのいずれにも答える生き方を視野に入れていたのである。

だが、既に見た通り、そうした思慮は一旦の思慮以上のものではなかつた。「ナニ、忠義の士といふものがあつて、国をつぶすのだ。己のような大不忠、大不義のものがなければならぬ」<sup>(32)</sup>。晩年のかゝる偽悪的発言に明らかのように、

勝は、「主家に忠」にしる「皇国の御為に忠謹」にしる、その根本に対象への結果責任を見出しもいた。「精神」の提示を以て答える域にはとどまり得なかつたと言ふべきであろう。

しかし、二重の忠誠を知り、対象への結果責任をそれなりに了解しながらも、「頑民」であり続ける者はいた。彼らが在るべき「精神」の提示にどの程度自覚的であつたかは、必ずしも定かでない。だが、なにがしかの尊敬を集めて、結果的にその提示を行なつたことは確かであつた。後々までの勝批判も、彼が置き捨てた精神の世界をかく照し続ける者がいたからであろう。勝批判の最たるものは周知の福沢諭吉『瘠我慢の説』であるが、それは福沢が栗本鋤雲（鯉）や木村芥舟（喜毅）といった「頑民」と交流を結ぶ中に浮上し、勝に対し「主家」と「皇国」とにわたる二重の裏切り、「三河武士の精神に背くのみならず、我日本国民に固有する瘠我慢の大主義を破り、以て立国の根本たる士氣を弛めたるの罪<sup>(33)</sup>」を言挙げするものであつた。

「主家に忠」の「私情」が道義的実存に係わるものとして継続を見せるとは、まさしくこうした「頑民」達においてであつた。彼らにあって国家存立への関心は明瞭である。そのために何が為されるべきかも、大凡了解されていたと言つて良い。木村芥舟を見るなら、「瓦解」前後の立場はむしろ勝に近く、その「嘆息」は幕府の威令が届かぬことにも増して「海内殆ど分裂の兆をなす」点に向けられていた。<sup>(34)</sup> 又、勝の対極に位置した栗本鋤雲とて、決して例外ではない。「瓦解」の直後、フランスの中央集権制度とその制度下の社会の実情を紹介した兩冊子『鉛筆紀聞』『晝窓追録』を世に出していたことは、まさに象徴的である。既に論じたように、彼はあくまでも徳川幕府の存続を前提として「闔國」の独立と統一を考へてきた。しかし、幕府の崩壊によってその政治関心が消滅することはなく、却つて輪郭の明らかなものとなつて在るべき制度の資料を提供する応答につながつたのである。

国家存立への関心は、しかし、実践への断念を伴うものであつた。「頑民」の真骨頂は、かゝる断念を介して国家を

領導する新たな権力に背を向け続けたことである。「幾度仕官をすすめられても、ふつつりとこの世から志をたち、詩や謡に一生を送って、徳川の旧臣として終りをまっとうした」木村芥舟、彼に代表される一群の退隱者の姿がそこに浮んで来る。<sup>36</sup>無論、このように「志をたち」しなければ権力との距離を保ち難いというのではない。実践の道筋は多岐であり、在野の活動領域がそれなりの可能性を持って広がっていた。だが、「頑民」であり続けた者は、こうした領域に足場を据えた場合ですら、なにがしかの断念を内に蔵していた。栗本に事は鮮明である。彼は『郵便報知新聞』に擲つてさらなる言論活動に向かったが、その「雄健の筆を揮」う働きは大方「往事」の「記述」に収斂し、周囲には「市井の間に隠れ、野老と混じて、亡国の臣を以て自ら命じ、復た当世の事を談せず」（島田三郎<sup>37</sup>）と映じていた。

実践の断念は、明らかに「主家に忠」の「私情」に発する。越し方の描写に窺えるように、「亡国の臣を以て自ら命」ずる決意が「当世の事」に係わりを持たぬ韜晦を促していた。だが、こうした起因が断念の軋轢なき持続につながる訳ではない。大局への関心が消えぬ以上、なにがしかの鬱屈は避け難かった。木村芥舟の以下の「要路者」批判は、間接的にはあれ、そのことを伝えている。彼は、「(明治)政府」に「遺棄」された「人材」に目を向け、その典型として暗に福沢諭吉を引き合いに出して「当路者漠然として之れを猥視し、一報酬のこれに及ぶなく、我国に此人あることを知らざるものの如きは如何」と述べていた。<sup>38</sup>福沢との親密な交流を踏えるなら、その異議立てが知己への肩入れとしてあったことは明らかだろう。<sup>39</sup>だが、「遺棄」された「人材」に配慮を求める論旨は、そうした援護射撃の域を越えて木村自身の満たされぬ境遇を告げている。「頑民」としては「遺棄」された「人材」に近く、しかも望んでそうあったために他を怨むことが出来ないという点で、より一層しんどかった。

「主家に忠」は、単に韜晦を促しただけではない。斯くして齎らされる鬱屈の中で個々をつなぎとめ、そのようなものとして生きた継続を見せていた。「亡国の臣」であることが、自我の充足に帰する存在の証しとなっていたのである。

一部に認められる過度な執着ぶりは、まさにこのことを告げるに他ならない。大局への関心が強く「亡国の臣」であることが辛い、その度合が著しい程より一層意識的に「亡国の臣」であろうとし、かゝる無理押しの中でかろうじて自己を保つ。誇張を恐れなければこのように描写し得る、かなり特異な動きが浮び上がっていたのである。

典型は、栗本にこれを見ることが出来よう。彼の場合、その言論活動の派生具合からして韜晦には徹し切れなかったとも言える。そこには、抑え込もうとしてなお溢れ出る大局への関心があった。黙止難く「当世の事」に言い及んだ幾つかの小論『統計表を読んで感あり』『農業博覧会の私評』『聴音器を試みるの記』等々が、事的一端を伝えている。だが、そうであるからこそ、彼はより一層自己の抑制にこだわりの、殊更「亡国の臣」であろうとした。そして、そのことによるマゾヒスティックな自足の中に、自身をつなぎとめようとした。以下に見る七言絶句は、或るナルシズムの響きを伴って、こうした内面の機微を伝えている。「門巷蕭条として夜色悲し／鶻鷓の声は月前の枝に在り／誰か憐れまん孤張寒檠の下／白髮遺臣楚辭を読む」(原漢<sup>(40)</sup>)。

この詩の表題には『題淵明先生燈火讀書図』とあり、必ずしも自己を直接詠じたものではない。とは言え、栗本のセルフ・イメージを告げていたことは確かであった。田園詩人として知られる陶淵明は、同時に又東晋の司馬氏に節義立てをした「靖節」の人である。栗本は、その陶靖節に自らの姿を託したに他ならない。当の詩句が巷間に喧伝されたため或る清国人から「東海之陶靖節」と持ち上げられた時、恐縮を見せながらも「心竊かに其訓を辱しめざらんと欲」していた<sup>(41)</sup>ことが、これを裏付けている。

逆境を孤独裡に耐える「白髮遺臣」。これをセルフ・イメージとしてなにかの自己陶醉を漂わせる精神は、あまり健全なものとは言えないだろう。だが、大局への関心を封じ込めて生きる時、それに伴う鬱屈を忍ぶことが却って存在の証しとなり、自我の充足を齎すこともある。マゾヒズムを基調とする栗本の詩句は、このような葛藤絡みの中に

で来るものであった。旧幕臣の去就を追った津田左右吉は、その詩句の「あはれっばい調子」を嫌い、それと共に事が葛藤絡みに発することも正確に見抜いて、「根底には一種の功名心の名残りが潜在する」と指摘している。<sup>(42)</sup>

自我の充足が自虐の末であるなら、その充足は必ずしも他者への寛容につながる。内に押さえ難いものがあってなお「亡国の臣」であろうとした栗本は、押さえ難いその分だけ他者に対しても又攻撃的であった。勝海舟の日記には、故岩瀬忠震等法要の相談事場で栗本が「荒れしらしいことを伝えている。<sup>(43)</sup> その場には、おそらく新政府出仕の旧幕臣が幾人か参加していたのであろう。勝は後日仲裁の労をとったらしいが、にも拘らず、殊に彼に対しては、栗本は終始険しい目を向け続けた。公刊された『瘠我慢の説』の例言には、「(栗本が)常に勝氏の行為に不平を懷き、先生(福沢)と会谈の語次、殆ど其事に及ばざることなかりしと云ふ」と記されている。<sup>(45)</sup> 福沢のその立論に対する所感は、「筆力、勝翁輩をして逃避の地無からしむ。何等痛快<sup>(46)</sup>」と、全き同調の呈を示すものであった。

ところで、「亡国の臣」であろうとした者が、すべて栗本の如くであったのではないことは勿論だろう。彼が葛藤絡みで張りつめた精神を生きたとするなら、木村芥舟は、余程自然体に近い後半生を送った。韜晦の日々が鬱屈なしに済んだのではない。だが、大局への関心が押さえ難いという訳でもなかった。諦観を以て鬱屈を躲すかのように、「なにも知らないおじいさんのよう」であり得たのである。そして、そうであるからこそ、彼は半ば自然に「徳川の旧臣」であり、栗本のように殊更の執着を示すことはなかった。意志的な姿勢に支えられていたことは確かであるが、それは「孤介峭直の士」をめぐる歴史追想風の発言等<sup>(47)</sup>に間接的に見て取れる程度である。自らを言挙げすることがほとんどなかったという点で、その越し方は傍目に真に「奥床し」く映じていた。

必ずしも勝批判に組み込まない穏やかさも、その一端はこうした自然体のゆとりが発しているよう。『瘠我慢の説』に対する勝の応答は、周知のように「行蔵は我に存す、毀誉は他人の主張、我に与からず我に関せずと存候<sup>(48)</sup>」というもので

あった。その時、木村は、福沢諭吉の普段に似ぬ主張に感興を覚えると共に、勝の世評超脱の応答にも手を打ち、一勝伯ノ答、学者ノ論ト云モ妙」と述べていた。<sup>(49)</sup>

「国家」に対する関心を抱きながら「亡国の臣」であろうとすることは、内に無理を重ねるに近く、諦観によってかろうじて救われるにすぎないとも言えよう。木村が「輿床し」くあり得たのは、そうした救いによってであり、無理を押し通せば、栗本のような圭角多きに行き着くしかあるまい。だが、無理押しになにがしかの見返りがなければならなかった。

木村と較べて目立つ栗本の視野の広がり、その種の見返りであったように思われる。彼は、自由民権の立論を新鮮な驚きを以て迎え入れ、「国威は応に民権と与に立つべし／洋説は時として俗目の驚くを教ふ」（原漢文<sup>(50)</sup>）と詠じていた。民権運動の高揚期と重なる『郵便報知新聞』への係わりが、こうした感興と共にあったことは言うまでもない。溢れ出る大局への関心は、一方において「亡国の臣」たることを葛藤絡みの苦行とさせながら、他方では、その在野の境遇に相応わしい新たな展望を確保せしめていたのである。

栗本が自由民権の立論をどの程度我が物としたかは、必ずしも定かではない。正面切った議論はなく、理論的な咀嚼はむしろ乏しかったとすべきであろう。だが、それにも拘らず、その気配り、目配りにはなにがしかの刻印がしるされていた。「往事」の「記述」として箱館奉行所付きの一時期を伝える文章『箱館叢記』『七重村菜園起原』『養登起原』等には、これをはっきりと見ることが出来る。ここでは、北方の防衛と開拓が課題とされる中、自身を含めた幕府吏僚の奮闘にも増して、数多くの無名の人々の一途な働きぶりが語られていた。「総数四十人に満た」ぬ箱館の医師達の自発的な病院設立の動き<sup>(51)</sup>、船大工豊次の同地にあつて「一切外国人の手を借らず始めて実用に適せし外国形船を造り出せし」努力<sup>(52)</sup>、「越前三条の人」松川弁之助のほとんど「独力」を以てする「唐太」開拓等々<sup>(53)</sup>。箱館での病院設立は奉行所

の肩入れによってその完成を見たが、要本は事の発端からきちんと言き起こし、「官の周旋保護は蒙ると雖も、其根源発起は全く衆医の所為に出たるなり」との断りを入れるのを忘れなかった。そこに明らかな如く、これらの「記述」を支えたのは、野に在って後楯を持たぬ人々をその正当な地位において評価しようとする姿勢であった。根底に「国威は応に民権と与に立つべし」との思いが存したことは間違いない。当該の姿勢は、おそらく昔時の実務官僚の最良の部分を持った周旋への気配りがかゝる思いを得てより鮮明なものとなった結果であった。

幕末の変動過程は、△国家の発見とその価値的上昇▽のみならず、△旧体制秩序からの個人の析出▽によっても特徴づけられる。その動向は、伝統的な忠誠観念の克服とはやゝ次元を異にする展開を伴っていた。制度流潰の成行きの中で個我的な意識や行動が目立ちはじめ、それと共に「忠義」「奉公」はもはや殊更の克服を要さぬ空洞化の様相を呈するようになっていたのである。

忠誠観念の克服は必ずしもその払拭を意味せず、維新以降もなにかの余韻をひきずることになった。だが、空洞化は葛藤や逡巡抜きを超脱につながって一種の忘却に帰し、概してそうした残響からは遠かった。そこでは、個々の出世欲や自立心が国家への使命と結びつく形で前面化しつゝあり、「主君」や「御家」に対するこだわりは、はっきりと消滅に向かっていた。

超脱の展開は、維新官僚の急進分子に鮮明である。伊藤博文に目を遣るなら、「築地梁山泊」を形作った彼にはその庇護者であった木戸孝允のようなこだわりは見られなかった。必ずしも「忠義」「奉公」と無縁だった訳ではない。僅かな昔、

長州藩にあって軽卒から士分への取り立てを受けた際には、「（御家に対し）此後の御奉公もとげ万分の一に報たてまつる覚悟」が語られていた。<sup>(55)</sup>だが、こうした観念は、もはや従来拘束力を持ち得なかった。新政権の誕生と共にその担い手の一人となった伊藤は、逸速く「封建廃止」を説き起こし、しかも内に何ら逡巡を示すことがなかったのである。<sup>(56)</sup>

「御奉公」の「覚悟」が昇進の見返りとして語られていたことは、看過されてなるまい。根底には「立身」や「功業」への意欲が溢れていた。「御家」に対する顧慮に代って顕在化したのは、「皇国」維持の熱情に連動する形でそのような意欲であった。「人は何でも地位の高い先輩から依頼せらるゝ様に成らなくてはいけぬ」との「心懸け」<sup>(57)</sup>に裏打ちされた上昇志向が、彼の政治的先取り主義を半面において支えていた。「己れを捨てゝ国を益し人を益すると云ふ事は、望むべからざる事である。縦し望んで見た所が実際に行なわれるものではない。……平生に当っては人各々其身を立てゝ以て勤むるのが即ち人を益し国を益して己れを益する事ではなからぬ」<sup>(58)</sup>。晩年のこうした発言は、現実政治家としての知見であると共に自身の越し方から来る確信であつたらう。

伊藤の初期の盟友には、必ずしも「立身」の意欲でないにしろ、それに通ずる個我的な意識が顕著であつた。例えば、大隈重信は、その創業の気組みについて「八百万の神」を引き合いに出し、「吾々不肖ながら神の一柱」と語つていた。<sup>(59)</sup>かゝる主体性の感覚は、国家に対する使命観を告げるのみならず、既に「横議横行」の青年達に弥漫していた。「唯我」の気分、「世を自由自在に扱ふこそ産れ甲斐は有りけれ」<sup>(60)</sup>の継承を示すものであつた。

事の進行は、新政府にあってその急進分子に目立ったが、必ずしも彼らに尽きるのではない。討幕勢力の中堅や末端を巻き込む権力の組織化それ自体が、多分に空洞化を前提とした超脱の展開と重なつていた。谷干城の「ずいぶん簡単な転向」（升味準之輔『日本政党史論』<sup>(61)</sup>）を以てする政府出仕は、そうした有り様を窺うに足る。土佐藩士として官軍の驥尾に連なつた谷は、しかし、暫くの間、朝廷の召命を固辞し、却つて藩体制の強化に務めた。その対応が、旧来の忠

誠観念、「恩義未だ報ぜず、越て日新の朝に立つ、臣実に安んぜず」<sup>(62)</sup>「今僅々の土州を以て云に、朝臣に成り有難さと申す者は百人に一人も有り難かたかるべし」<sup>(63)</sup>から来ていたことは明らかである。だが、このような「封建主義」は、「功業」への激しい意欲を伴っていた。そして、その交錯する所に、次の「大乱」を予測して帰属の藩をさらに押し上げようとする気構えが生れていた。「余は、薩長が互に権力を争ひ大乱を引起すことを予期して、此時期の来るに際し土佐の力を養ひ朝廷に大忠を盡すを目的とせり」<sup>(64)</sup>。「忠義」「奉公」は、或る意味で、こうした気構えがリアリテイを持つ限りのものであった。薩藩置県が日程に昇ってそのリアリテイが失なわれた時、彼はいとも「簡單」に「断然旧主義を廃棄」し、おそらく「功業」への意欲に突き動かされて「日新の朝に立つ」こととなったのである。

統一的権力の一員となつての「立身」や「功業」は、但し、それなりの翻身を必要とした。「風雲の会に乗せんとす」の投機的な気構えは、もはや一掃されなければならない。代つては、権力の持続を暗黙の前提として、職務の課題を確実にこなしてゆく実務家的な姿勢が求められていた。しかも、西洋化を基調とする創業期であれば、その姿勢は、新たな知識や技術の蓄積に裏打ちされてあるべきだった。振り返って伊藤を見るなら、彼はこの種の要件を十二分に満たしていたと言えよう。幾度かの洋行経験に加えて旺盛な読書欲を持ち、そこからする知的蓄積は、以下の通り、「地位の高い先輩」の「依頼」を招くに足る用意周到な勤めぶりにつながっていた。「故三条、岩倉及木戸諸公が自分に待つ所があったのは、何事に附けても諸公の頼まぬ前に其将来頼まるべき事柄の調査をして、ちゃんと準備して置いた為めで、何時でもさあといふ時に役に立てた」<sup>(65)</sup>。谷に関して言えば、彼も又こうした在り方への可能な限りの接近を示していた。「其思想は全然此国漢学に依りて養成せられ、為に終生保守主義の人」<sup>(67)</sup>であったが、にも拘らず、新政府の軍人としては「外国の兵書」にも応分の「精通」を見せ<sup>(66)</sup>、初期には兵制改革の先頭に立った洋行帰りの山県有朋の熱心な協力者であった。「世間の一部には動もすれば子を長藩の爪牙となりて、其走狗たるに甘んじたる如く誹議するものある

も」と回顧されるように<sup>(69)</sup>、その職務精勵は、時に中心派閥への追従者と目される程であった。

だが、すべてがこうした翻身をなし得た訳ではない。桐野利秋やその周辺の旧薩摩藩士の形状は、権力に組み込まれた者の、にも拘らずの不適応を告げている。混沌と動乱の中に培われた投機的な気構えは、そのまゝに所を得た時、容易に放恣に転化する。彼らと陸軍で肩を並べた谷は、「強兵は則ち驕兵」のそうした様子を次のように語っていた。「桐野新作（利秋）の邸拜へは、兵卒共相携へ来り、新ドン／＼と呼集ひ、互に大膝を組み酒のみ噪喧しこと、旧時に異ならず<sup>(70)</sup>。仲間内のもたれ合いを伴うその気儘が、機構の運営を妨げていたことは勿論である。谷は、続けて「此の如き不秩序の中にて軍律発布になりしが、其適用に至りては殆と実行し難し」と述べていた。

かつての討幕雄藩を中心とする士族反乱は、かく「不秩序」を成した部分が政府を離れ、再びその乱世型の野心を顕在化させていったためでもあった。西郷隆盛を担いで鹿児島に拠った桐野は、傘下の私学校生徒を相手に「古へから英雄が事を挙げ往々失敗するは、機会を見る明がないためであった。吾々が一たび脛を上ぐれば、天下の志士は皆金鼓を打たずして集まる」との「大気焰」を上げていた<sup>(71)</sup>。同じ権力離脱グループの民権運動への係わりも、こうしたメンタリティと決して無縁ではなかったろう。東京にあって不平士族の意見を代弁し、同時に又苛烈な民権の主張を押し出した始めた集思社、その発行になる『文明新誌』には、「不幸ニシテ明治ノ昭代ニ逢ヒ、戦ハント欲スルニ地ナク、斬ラント欲ルスニ賊ナク、……鬱々トシテ北斗ノ光鋸ヲ睥睨シ、脾肉ノ生ズルヲ悲シミナガラ、時々筆ヲ執テ新聞ヲ書ザルヲ得ズ」といった文言が見受けられる<sup>(72)</sup>。

ところで、権力の組織化それ自体は、討幕勢力一部のかゝる不適応と離脱をもはや傍のこととしていた。それは、実務家的人材を目当てにかつての敵対分子をも組み込む進行を見せていたのである。こうした横広がりの動きの中で大きな存在だったのは、昔時に幕府改革派の裾野を形作った部分であった。彼らにおいても「忠義」「奉公」観念の空洞化

は鮮明であり、そのことが超脱の展開につながって「立身」や「功業」への歩みを促していた。

繰り返し述べたことであるが、幾度かの幕政改革は、その進行の過程で、一方に新たな知識や技術を身につけた人材群の内部育成とその地位の相対的上昇を、他方では、洋学者及び知識志向型青年層の江戸への集中とその一部の幕臣化を、それ／＼結果していた。言うところの改革派の裾野である。こうした部分は、年齢が若く出自が低い程、又、陪臣上りの者程、「立身」や「功業」への意欲が盛んであった。そして、「忠義」「奉公」は、多分にその意欲が満たされる限度においてであった。枢機に与かったような少数の例外を除いては、やはり空洞化が著しかった。

彼らの越し方からして、その上昇志向はむしろ権力の機構を前提としていた。いわば、その枠内において新たな知識や技術の先取りを手段とするものであった。このような傾性に忠誠観念の空洞化が重なりとすれば、大方がやがて維新政権に組み込まれていったのも故なしとしない。だが、そこに広がる超脱の展開は、必ずしも平板なものではなかった。「主家」の衰運を前にしては、やはりなにかの引き戻しがあった。直臣として生れ落ちた者に、それは特に著しい。又、これを振り切ったとしても、自身が旧敵の属性を背負う以上、制度的上昇への樂觀は許されなかった。陪臣上りの者として、その例外ではない。付言すれば、かゝる制動要因の下で官界入りを拒む者もいたのである。

忠誠観念の空洞化は明らかであるが、即座には超脱につながらぬ。引き戻しが働いてのこうした逡巡の相は、桂川甫策の「戊辰の瓦解」後程なくの心境に窺い得る。徳川家と共に駿河に移り住んだ彼は、新藩の旧態然とした様子に失望を深め、帰商して江戸に留まった兄の甫周に次のように去就の悩みを訴えていた。「奸吏ヲ一鋤シ旧勢ヲ復シ」たくはあるが、熟慮すれば「奸賊ヲ攘フモ後奸又出ジベシ。傾ク運ハ是非モナシ、尽力無益ニ属スヘシ。去ルベキカ、死スベキカ、御高説伺度」<sup>(7)</sup>。周囲には、既に「有志之士追々退散」の動きが広がっていた。「去ルベキカ」の思いは、おそらく

そうした動きにつられてのものであったろう。時代の転換の中で一人貧乏籤を引くことへの不安が、そこには見え隠れしている。「忠義」「奉公」は、もはやこの種の不安の前で無力に近く、確実に空洞化しつゝあった。

だが、「簡單」に「旧主義を廃棄」出来た訳ではない。「主家」凋落の現実は、一方において却って「旧主義」の一旦の高揚を齎していた。凋落を強いた「敵国」に雪辱を果そうとする気構えが、生れていたのである。「試ニ思フ、駿州政公平上下一和逐日開化ニ趣カハ、前日ノ恥辱聊雪ムベシ、敵国恐レル可シ」。又、こうした気構えが萎みがちであったとしても、他方では、「主家」を見限るに忍びない気持を結果していた。「旧主義」の「廃棄」には歯止めがかかっていたとも言える。去就に迷う中での「死スベキカ」との言葉は、その端的な現れであった。桂川は、まさに引き裂れる心境にいた。

空洞化の然らしめる所として、彼はこうした迷いをひきずりながらも間もなく「主家」を「退散」、新政府に仕えることになる。だが、官界参入の者のすべてが逡巡がちだったのではない。そこには、「旧主義」の引き戻しに既に決着をつけた部分も混っていた。逆説的に聞えるかもしれないが、「戊辰の瓦解」時に脱走抗戦して生き残った者の多くが、そうであった。

典型は、榎本武揚にこれを見ることが出来る。桂川が去就に悩んでいた頃、降伏して獄中に在った榎本は、或る種の清朗さの中にいた。当時、家族にあてた書信には、それ迄の労苦を踏える形ではあれ、次のような自足の境地が語られていた。「私義是迄之艱難配意等は、先ニも御面会仕まつらず候へでは、紙筆に尽し難く候。去りながら一語にて申上候へハ、衆ニ代て生命を棄候段、士道ニ背き候事は之無き候間、此事御安心下さる可く候。御赦免等之事は、いつごろやら此方にては相分り申さず、尤其事をさまで歎き候理も之無く、只ミ天命ニ任せ申候<sup>(16)</sup>。「衆ニ代て生命を棄候段」とは、直接には脱走軍の長として部下の助命と引き換えに敵方軍門に降ったことを指すが、<sup>(16)</sup> 広くは、「君家之冤罪を雪め、

同藩士の凍餓を援<sup>(7)</sup>わんとした抗戦行そのものを意味しよう。いずれにしても、彼は、為すべき事を可能な限り行なつたという心境にあつた。

「主家に忠」の「旧主義」は、こうした自足の中で急速に姿を消す。既に十分に「主家に忠」であつたのであり、もはや殊更のこだわりを持つ必要はなかつた。<sup>(78)</sup>脱走時に目立った「旧主義」、「御累代様御神霊に対し申訳の一分とも相成候を而巳たのしみ居候」<sup>(79)</sup>は、ここに來て片隅のものとなつていた。代つて顯著になつたのは、前章で見たように従來の立身を支えて來た知的先取りの精神であり、その精神の結果としての「新知識」たる自負、「殊ニセーミ学は未だ日本國に小生ニならぶ者之無く」<sup>(80)</sup>等であつた。危機における忠誠心の高揚に自分なりの決着をつけた形の榎本は、個として生きる姿勢をはっきりと打ち出すようになっていたのである。以下の獄中の抱負は、こうした姿勢が「主家」を飛び越えて國家への関心と直接結びついていったことを示している。「小生モ色々目論見居候事、山ノ如クニ御座候。但し、日本國之為め並ニ商法之為め等ニ御座候」<sup>(81)</sup>。

獄中の抱負に商業活動への意欲が語られていたように、榎本は、初発から新政府に仕えることを考えていたのではな<sup>(82)</sup>い。だが、在野に引き留める力を持つ「旧主義」は、その自足の中で消えかゝつていた。「御赦免」<sup>(83)</sup>後の歩みは、開拓使四等出仕を振り出しとする比較的順調な官僚的「立身」であつた。彼は、その「立身」に見合う政府構成員であつたと言える。明治一〇年前後の再波乱の時期、特命全權公使としてロシアに駐留の榎本は、その書信に「日本は、薩刀令出たるを見レバ政府の勢ひ稍堅く相成、慶す可き事に候」と記し、<sup>(83)</sup>鹿児島<sup>(84)</sup>の反乱の鎮圧についてもかゝる立場から「征討之將軍等一同之尽力、感涙を催し候」と言寿いでいた。又、民権運動に対しても、その國權擴張の立場から冷やかに突き放し、「日本新聞紙屋流は、只々民権とやらの陳言を燒直して収々するのみにて、『コロニゼーション』等の『ヂレクト・インポルタンツ』等に意を注がず」<sup>(85)</sup>「諸先生『モータルル』や『ライト』之事而已役々するときは、國民『アンテ

ルプライズ』の気象を鼓舞する能はず」等々と語っていた。

こうした翻身の榎本に過去から持ち越すものがあつたとするなら、それは、かつて行動を共にした戦友達への連帯感と同情であつたろう。新政府に仕えて程なく辞した永井尚志へのひそかな生活援助、各種大臣を歴任するようになってからの山内提雲・林董・蛭子末次郎等の引き上げ等々。このような戦友への配慮は、無論、硝煙の中で没した者達への哀惜につながっている。のみならず、哀惜は、体制の側から彼らに向けられた名分論的貶斥への怒りにも通じていた。

鳥羽伏見の戦場跡に幕軍戦死者追悼の記念碑が建てられた時、榎本が「旧幕有志一同」を代表して寄せた祭文にはそのことがはっきりと窺える。「惟ふに骨を草野に暴尸を馬革に衷むこと、是武士の本懐とする所にして、其国家の爲め、君父の爲め、民人の爲め生命を鴻毛より軽きに比するも、芳名を天下に留めんが爲めにあらずや。嗚乎、然るに諸君は骨を此野に暴し、而してその尸は馬革にだも衷む能はざりき。斯くの如くして、其遺す所の名は賊徒と罵られ、朝敵と嘲らる。それ豈諸君の戦の初めに期する所ならんや」。

官界参入の旧幕臣は、個々の内面的な有り様の如何を問わず、押しなべてかつての政敵たる属性を背負いこまされてきた。恵まれたコースを歩んだように見える榎本すら、その例外ではない。「成敗の在る所功罪の判るゝ所とな」るこ<sup>(86)</sup>とへの怒りは、自身の吏僚生活の中で倍加されたのであり、明治一四年の海軍卿辞任の一件では、旧「賊軍」の悲哀を嫌という程味わされていた。<sup>(87)</sup>「立身」を志向する者達は、こうした困難を前にしてかなりはっきりとした「世渡り」の姿勢を身につけてゆく。

榎本と同様、脱走抗戦して新政府に仕えた大鳥圭介には、そのことが最も顕著である。彼は、自らの越し方を踏えた家訓の中で、「最初の位置低くとも其身の勉励耐忍と真実との志望あれば追々昇進して宿念を遂ぐる事難からじ」と、<sup>(88)</sup>何よりも当人の自覚と努力を「昇進」の根本としながら、それだけに尽きず、「世の風潮に順逆あり、又時勢の遭遇に幸

不幸あり」として「時機を察する先見の明」を強調していた。<sup>(93)</sup>そして、このような「時勢」への適応に続けて、「然るべき先導者を頼り出身の道を啓くこと亦必要ならん」とし、以下の如く徹底した他人利用の心構えを語っていた。「先導者に頼るとは少しく卑屈の様にも考へらるれど、一生之に屈従する訳にはあらず、唯出身の階段を踏み独行の地歩を定むる方便なれば、強て嫌ふべきにあらず。凡て人間の世渡りには一屈一伸あるを免れず、姑く屈するには後に大に伸ぶる基と知らば堪へがたき事にはあらずかし」。「出身」のためには「先導者」への依頼が不可欠であるが、それはすべからく「方便」にすぎないのである。こうした「世渡り」の姿勢からすれば、自分への依頼は逆に疎ましかったろう。「平素親戚故旧に薄」い交友態度が、そこに生れる。彼は、当人の自覚と努力が重要であるとの主張を押し出して、「親戚故旧と雖も縁者に大鳥あるを頼んで世に処せんとするが如き精神にては、根本に於て誤れり」と語つてもいた。<sup>(95)</sup>

大鳥は、桂川や榎本のような生れ落ちた時からの幕臣ではない。その洋学の素養を以て幕府の臣籍を得、「本読みを専門にするのは出世が遅い」として新設の陸軍の武官に転じた者だった。<sup>(96)</sup>彼の「世渡り」の姿勢は、既にこうした「出身」の過程で現出していたものだろう。とは言え、そのドライさは、幕府の「瓦解」による挫折と以降の旧「賊軍」のハンディを抜きにしては考えにくい。居直りに似た割り切りは、過度な困難を潜り抜ける中で浮び上がってくる反応パターンに他ならない。

ところで、官界参入の旧幕臣の「世渡り」は、ひたすら上を眺めての割り切りに限らない。迎合と紙一重のこうした対応を一方の極とすれば、他方には、官界からの途中離脱を考えに入れた多分にリスク保障的な所作があった。榎本や大鳥の北海道での土地所有<sup>(97)</sup>、殊に「露国駐割の頃より追々地所を払下げられ、既に昨今は十万をもて数ふる程の坪数にいたりしよし。……地代は普通の半額にて収めらるゝが、夫にても一ヶ月千円内外の収入なりと云ふ」と『東京日々新聞』にスッパ抜かれた榎本の<sup>(98)</sup>大土地所有は、そうした性格のものであったろう。榎本は、初期に商業活動への意欲を示した

が、新政府に出仕後もしばらくはそうした意欲を失なわず、一方で様々な物産知識を収集すると共に、他方では、このような形で資本の投下と保全を行なっていたのである。<sup>(99)</sup>かゝる対応振りがかなり広汎に認められたこと、又、そうした中から、現に官界を離脱してゆく者があつたことは、既に前節で見た通りである。

新たな知識や技術を頼んで次の時代への適応を見せた幕府改革派の後身は、しかし、そのすべてが権力に組み込まれていったのではない。「旧主義」の引き戻しの中で、これを払拭し難いまゝ官界入りを拒む者がいた。又、そうしたこだわりから遠かつたとしても、権力にとつて旧敵に他ならぬ自己の属性を踏まえ、制度的上昇に対するあらかじめの見切りを以て野に流れる者がいた。いずれの場合においても、その選択に相応しい新たな理念に支えられつつ、である。

こだわりをひきずつての歩みは、成島柳北にこれを見ることが出来る。桂川が去就に悩み、榎本が或る種の清朗さの中にあつた丁度同じ時期、柳北は、立つ瀬のない苦しみに呻いていた。彼は、幕府崩壊の局面で会計副總裁への抜擢を受けていたが、そうした人選に相応しく扱つて立つ当時の主張は恭順論であつた。前將軍慶喜の卜野大慈院蟄居に際しては、その面前で「上野ニ屏居スルハ不可ナリ、宜シク当ニ単行京師ニ上リ、其罪ヲ謝スベキナリ。臣等不肖ナリト雖、請フ、敢テ扈從ノ任ニ当ラン」と説き起こしたとされる。<sup>(100)</sup>又、外国軍隊に依存して抗敵すべしとする立論に対しては、「其不可を痛論」したとも言う。<sup>(101)</sup>柳北には、彼我の力関係がそれなりに見えていたのだろうし、内乱のこれ以上の拡大は避けるべきだとする配慮も働いていたのだろう。<sup>(102)</sup>

だが、彼の心情は、必ずしもこうした政治的判断に付き従うものではなかつた。それは、むしろ、「主家に忠」として幕府の崩壊と運命を共にしようとする主戦論者の心情に近かつた。柳北は、慶喜の蟄居と共に致仕し、程なく山陽地方への傷心行に旅立つたが、湊川を横切つた際に「楠子（正成）の墓を吊」して詠じた次の一句は、そうした情念の有

り様を問わず語りにかけている。「英雄ノ得失誰レト与ニ論センノ一死君ニ報ズ名故ラニ存スノ当日若シ功業ヲ成シアラバノ書生ハ未ダ必シモ忠魂ヲ祭ラズ」<sup>(103)</sup>。やゝ突き放した感じがするのは、楠正成が尊皇のシンボルとして敵方の専有物と化しつゝあったからだろう。だが、そうした屈託を割り引けば、「一死君ニ報ズ」ることへの同調は明らかである。現実には無益でも、否、却って無益であるからこそ、その殉節は際立つ。柳北は、このように謳っていたのである。政治的な判断と個人的な心情がかく行き違ふなら、自己を保持し難い苦しみに呻吟するのも当然であった。山陽旅行の記録『航薇日記』には、精神の地崩れにも似た「狂痴に類せし事ども」<sup>(104)</sup>が随所に記されている。その記録に残る次の戯歌への感興は、引き裂れて立つ瀬のなかつた当時の心境を如実に物語るものである。「いささらハ身を投んとハ思へとも向ふの岩にあたまあふなし」<sup>(105)</sup>。

柳北は、こうした苦しみの中で「われ歴世鴻恩をうけし主君に、骸骨を乞ひ、病懶の極、真に天地間無用の人となり。故に世界有用の事を為すを好まず」と語り、「頑民」<sup>(106)</sup>的な韜晦の余生への傾斜を示していた。自己の心情に即した歩みを踏み出し始めたのである。「無用の人」に徹し得たかは別として、これを称してハスに構える態度は、以後ほゞ一貫したものとなる。「吾は固より無用の人なり」<sup>(107)</sup>「自他ニ於テ無用ノ人」<sup>(108)</sup>「久シク世間無用ノ廢物トナル」<sup>(109)</sup>等の発言が、折に触れて繰り返されていた。榎本武揚と比較する時、内面の経緯はまさに対照的と言えよう。榎本は、脱走抗戦を高揚する「主家に忠」の発露とし、以降はその発露によって却って捉われぬ境地へと飛躍した。だが、「主家」の崩壊に手も貸すなかつた柳北は、せり上がる「旧主義」の捌口を見出せぬまゝ、それへのこだわりを引きずっていったのである。柳北のこだわりは、しかし、栗本鋤雲や木村芥舟のそれと同じなのではない。栗本が陶淵明に己れを重ね合わせたように、柳北も又その往昔の詩人の「仕えずして隠る之志」<sup>(110)</sup>に自らの拠り所を求めていた。だが、こうした韜晦は、栗本の場合と異なり、必ずしも「当世の事を談ぜず」といった時代的適応の抑制に帰するものではなかつた。個として持て

るものを以て立つ姿勢は、時がたつ程顕著になつて来た。又、それと共に、大局への関心は先行きへのはっきりとした抱負となり、併せて時代の転換に深く分け入る対応につながつて来た。この種の適応動向は概して「主家に忠」の空洞化を伴うが、柳北もそれと全く無縁な所にいた訳ではなかつた。「死にましたら徳川氏の遺民柳北の墓とでも書いて貰いますと昔の唐人には誉れませうが、マサカ其様なひがみ根性でも有りません」<sup>(11)</sup>。事は、こうした発言や、「殷の頑民」としてシンボリックな意味を持つ「伯夷叔齊」を「自家一身ノ思フ所ヲ固守シタル義人ナルノミ。到底當時國ノ為ニモナラズ、民ノ為ニモナラズ、何ノ役ニモ立タザリシナリ」と突き放す議論などに見てとれる。権力に背を向ける生き方は一貫していたが、「旧主人ヲ有難ク思フ」<sup>(12)</sup>類のこだわりは内心の痕跡というに近くなり、その在野の日常は、むしろ新たに獲得の理念がこれを支えることになつたのである。

持てるものを以て立つ姿勢は、鮮明である。「仕えず」を一貫させる中で、それは、なによりも生活基盤の確保と安定につながる現われ方をして来た。「甚シイ哉、日本人ノ時間ヲ軽々シク思ヒシヤ。凡ソ人生に於テ時間程大切ナル者ハ無キニ……。……甚シイ哉、日本人ノ労力ヲ重ンゼザルヤ。凡ソ人生ニ於テ労力程貴重ナル者ハ有ラジ」<sup>(13)</sup>。このように「時間」と「労力」の「貴重」を説いたのは、己れのもに抛り、それを費やすことに応分の対価を求めたためであつた。『朝野新聞』に蟻踞して文名を馳せた柳北は、詩文や書の依頼が殺到し始めたことを受けてその料金規定を掲げ、「文士ハ文字ヲ以テ飯ヲ食フ者ナリ。故ニ曰ク、硯田ニ耕スト。是レ商法ニ非ズシテ何ゾヤ」と主張して来た。<sup>(14)</sup>そして、現に謝礼のない揮毫依頼に接しては、「筆墨ニ価アルヲ知ラザルカ」と不快を示すようになって来た。<sup>(15)</sup>これらの言動は、そうした在り方の一端を告げるに他ならない。

詩文や書は頼まれることが煩わしい「雑多な事」であり、料金を言挙げしたのはその牽制の意味を持つ。だが、「商法」の弁はとって付けた口実ではなく、彼がその暮らしの基本とした考えであつた。「本業」についてもやはり「新聞

屋ハ商売人ニシテ<sup>(18)</sup>との意識を持ち、「無法ノ大安売ヲ以テ得意先ヲ競フノ風習」が「新聞屋」に及ぶようなことに対しては、強い警戒を示すなどしていたのである。<sup>(19)</sup>彼に言わせるなら、「武士ハ食ハズト高楊子ナル者ガ莫ノ大丈夫」と見るのは「偏人」以外の何物でもなく、<sup>(20)</sup>貧困は専ら「己レガ働キノ無サニ根ス」るものであった。<sup>(21)</sup>

柳北は、しかし、生活基盤の確保にのみ汲々としたのではない。「迂生は一体旧幕府にて開化急進党の一人にて」といった物言いに窺えるように、彼が持てるものとして自負したのは、まず以て昔時の軌跡に負う「開化」への見識であった。そして、その見識は、「仕えず」の歩みの中で「権利自由ノ説」を根本に据えた政治と社会への新たな抱負となり、或る程度波乱含みの後半生につながっていたのである。『朝野新聞』に拠った言論活動も、以下の発言に明らかのように、基本的には「人民ノ権利」の「伸長」を目指す在野の「先導タル者」への意志、もしくはその協同歩調者であるろうとする覚悟に基づいていた。「政府ノ忠臣タル者ハ貴ブ可キモ、国民ノ先導タル者モ亦貴ブ可キニ非ズヤ。其忠臣ニ倣シテ利禄ヲ求メンヨリハ、寧ロ先導タル者ト共ニ人民ノ権利ヲ伸長スルニ若カズ」。<sup>(22)</sup>

柳北は、当時の「文明開化」の単純な賛同者であったのではない。その現状に対しては、西洋風俗の模倣に流れる「皮相の開化」と見て、「ロニ開化ヲ唱エテ腹ニ開化無ク、身ニ開化ヲ飾リテ脳ニ開化無シ」<sup>(23)</sup>と手厳しく批判するのを常とした。彼が説いたのは、なによりも「開明ノ精神」を備えることだった。そして、その「精神」が、つまりは「権利自由」に他ならなかった。「何ヲカ精神ト謂フヤ。人々其天賦ノ権利ヲ全ウスルヲ得テ、自由ノ楽境ニ其生ヲ安ソズルヲ得ル。斯クノ如クシテ、始メテ開明ノ精神ヲ具フルト謂フ可キナリ」。<sup>(24)</sup>柳北は、こうした「権利自由」を人々の物心両面にわたる「自立」の延長線上に置く。彼の「希望」は、まず以て「日本全国ノ人民ガ自ラ耕織シ自ラ販売シテ以テ其生産ヲ立テ、独立自主ノ精神ヲ励マ」<sup>(25)</sup>すことにあり、それを抜きにして「人民ノ権利」の「伸長」を語ることはなかった。ミルやスペンサーにのぼせる「書生連中」に向かつて「所謂自主自由ヲ得ルノ道ハ、一家ノ生産ヲ立ツルニ在

リ」と説き、自身も又それなりの自覚を以て生活基盤の確保につとめた所以である。<sup>(127)</sup>

このような立論は、政治への偏りを嫌う態度に通じる。不平士族の間に民権論が広がり始めた時、柳北は却ってこれを警戒して「民権々々トノミ号呼シ、政府ニ抗シ官吏ヲ庄ルコトノミヲ以テ民権ノ目的トス。是レ徒ラニ擾乱ヲ煽起スルノミニテ、毫モ正理ニ益無キ也」と述べていた。<sup>(128)</sup> だが、政治への偏りを嫌ったことは、必ずしもこれを次善と見たことではない。新政府が讒謗律と新聞紙条例の制定を以て言論の弾圧に乗り出した際、柳北がこれに執拗で果敢な抵抗を試みたことは、既に良く知られている。彼は、その抵抗が禁獄四ヶ月に終わっても、なお「委曲宛転事ニ託シ、物ヲ仮リ、以テ冥々ノ中ニ勸懲スル」<sup>(130)</sup> レトリックに依拠して、政府筋を攻撃することを止めなかった。そして、西南戦争を経たは、「新聞記者」の議論こそが多くの不平士族を「傍観」に導いたとして極力言論の自由を回復しようとし、さらに又、民権運動の「豪農富商ノ少年ヨリ中年ニ及ビシ者」を巻き込む高揚の中で、「取ラント欲スル者ハ必ず取ル」<sup>(131)</sup> とはつきり「参政ノ権利」の獲得——憲法制定・国会開設を主張するようになったのである。「上ハ政府ノ為メニ考フルモ、下ハ人民ノ為メニ慮ルモ、他ニ好手段ナシ。唯ダーノ憲法ヲ定メ、国会ヲ建ツルノ良図アルノミ」<sup>(134)</sup>。柳北は、やがて立憲改進黨の設立に加わり、「新聞ノ親方ニシテお負ケニ政党ノ肩書アリ」<sup>(135)</sup> となる。

柳北が後年に到って「我レ迂濶ナリト雖ドモ、若シ鉄槌ヲ以テ我が気節ヲ微塵ニ碎折シアラバ、亦以テ立派ナル掃髻者流(官吏)トナルヲ得ベシ」と語る時、その「気節」とは、従って、もはや必ずしも「忠厚ノ道」を固守することではない。言論人や政党人に「其主義ヲ変シ其節操ニ乏シキ」官吏への翻身者が少なくない中、それはなによりもまず自ら奉ずる「主義」に忠実であることを意味した。柳北においては、新たに獲得の理念が「旧主人ヲ有難ク思フ」<sup>(136)</sup> こだわるところで、このことを踏えて他の旧幕臣に目を遣るなら、野に屹立した者にはやはりその選挙に見合う理念が鮮明で

あった。典型として取り上げるべきは、福沢諭吉であろう。その抛つて立つ議論は、無論、一様ではない。良い意味での状況主義者であった彼は、「文明」の発達を期しながらもその理想は彼岸に置き、現実に対しては独自の超越的立場からその趨勢に応じた均衡論的対応、「虚心平氣靜に俗界の形勢を視察し、其及ばざるを助け其過るを制し、滔々たる俗勢の逶逸を止むる」を以てした。<sup>139</sup> こうした在り方は、時を経る程、或る種の知的優越感を伴って顯著となり、柳北のような血性の人物をして「一般人民ヲ馬鹿ニシテ高慢ヲ吐キ出サル、ハ御勝手次第」と言わしめる。<sup>140</sup> だが、その「俗界の形勢」に応じた対応も、在野民間の価値づけという点ではほゞ一貫していた。明治啓蒙の第一人者として世に出た初期には、「けだし一国の文明は独り政府の力を以て進むべきものにあらず」とし、「政府の力と互に相平均し」得る「国民の力」を養うべく、「旧弊を除きて民権を恢復せんこと方今至急の要務なるべし」と主張していた。言う所の「旧弊」とは、「世の人心」の「官を慕ひ官を頼み、官を恐れ官に諂い」の「卑屈の氣風」を指す。そして又、これを「一掃」しての「民権」の「恢復」とは、人としての「權利通義」に基づき物心両面にわたる「一身独立」を生きたること、各人がそれぞれの地位に応じて「私立」<sup>141</sup> することを意味する。福沢が、自らの在野の歩みを「今我より私立の実例を示し」と意義づけていたことは、周知の通りである。議論は、その後においてもなお「官尊民卑の弊」を突く形で、或いは又「後進生の立身熱」を「工業商賈」に向つづけるといふ形で、一定の継続を見せていた。<sup>142</sup> 彼は次第に國權論的な色合いを強めて「官民調和」を説くようになったが、その国内融和の立場から価値の偏在による紛糾を避けようとしたのである。<sup>143</sup>

福沢の初期の議論は、柳北の立論に通ずる部分が少なくない。その逸速くの言論活動と広汎な影響力とを踏えるなら、柳北の方が福沢の議論から多くの啓発を受けていたとも言えるだろう。「一身独立」——「私立」の主張は、官途に背を向けた旧幕臣にとって或る程度進むべき道筋を告げるものであったように思われる。例えば、クリスチャンで後に

麻布中学を管轄した江原素之は、「私も之れで福沢主義です」と語り、殊にその「実業的方面に注目せられたこと」に大きな傾倒を見せていた。<sup>(145)</sup>

こうした福沢は、しかし、柳北と異なり、最初から「旧幕府に操を立て」る式<sup>(146)</sup>のこだわりと切れていた。彼にとって「幕府の遺臣」であることが問題になるとすれば、それはその個人的な先行きの斟酌においてのみであった。明確な理念的裏付けを以てする「私立」の足跡は、或る意味でこうした斟酌をくぐる中に始まっており、権力にとって旧敵に他ならぬ自己の属性を踏え、制度的上昇に対するあらかじめの見切りを以てするものであった。

幕府の崩壊に際して、福沢に格別の動揺はなかった。かつて「公儀え御忠節」<sup>(147)</sup>を語らなかつた訳ではない。中津藩の軽輩から洋学の知識を以て幕府の直臣とされた彼は、その身分的上昇に見合う心理的な同調を示し、長州再征に際しては、これを「恐れながら御家の御中興も日を期し相待つ義、誠に以て有り難き仕合」と受けとめるなどしていた。<sup>(148)</sup>だが、陪臣から直臣への立身も、半面においては、「筆とる翻訳の職人」<sup>(149)</sup>として便利使いされるだけにすぎなかつた。同様の境遇にあつた大鳥圭介が、「出世が遅い」として敢えて軍人に転出したとすれば、そして、その結果、一旦のことではあれ、「幕府に忠節を盡し候覚悟」に捉われていったとすれば、福沢の反応はむしろこれと対照的である。彼は、そうした中で、一方において、幕府幕臣の「門閥制度」や「穀威張」<sup>(150)</sup>に対する不満を沈積させていった。『福翁自伝』は、「幕府の穀威張が痼癩にさわる」<sup>(150)</sup>数多くの事例を伝えている。当時の原資料に照して見れば、それを額面通り受けとめる訳にはいかないが、しかし、内に積もるものがあつたのは確かだろう。又、こうした不満の沈積のもう一方では、殊更の転出による立身を志向せず、却って身につけた知識を活かして『雷銃操典』『西洋事情』『西洋旅案内』といった翻訳著作の活動に余力を向けていった。かゝる対応の中で、彼はやがて突然の譴責処分を受ける。軍艦購入のためのアメリカ出張中に不行届があつたというのが理由であるが、それは、「公儀え御忠節」を語らせた立身の頓挫に他な

らない。このような経験を挾んで「戊辰の瓦解」を迎えた時、そこにはもはやなんの憤激もあり得なかった。「徳川家へ御奉公いたし計らずも今日の形勢に相成、最早武家奉公も沢山に御座候<sup>131</sup>」と、反応は素気なく、むしろ傍観者に近い。代わりに目立ったのは、己れの持てる知識を頼んで独自の活動の場に抛ろうとする決意、「天下の文運斯く衰微に及び候処、独醒の見を以て独り文事を盛に行ひ、世の形勢如何を問はず執行致す可くと存候<sup>132</sup>」「今人の知識を育せんとするには、学校を設けて人を教るに若く物なし<sup>133</sup>」であった。

ところで、「公儀え御忠節」に捉われることがなかったとしても、徳川家の禄を食んだ事実が消える訳ではない。福沢の「文事」への覚悟は、その事実を踏えた先行きへの斟酌を伴っており、これに裏打ちされた在野の選択でもあった。福地桜痴は、「余は明治二年なりと記憶す」として福沢から次のような忠告を受けたことを伝えている。「君は余に告げて曰く、今や薩長土肥の諸藩、維新の功勲を以て朝政の枢機を専有す、足下は幕府の遺臣なり、出て仕ふるも牛後に居るに過ぎざるべし、足下当世に志あらば、塾を開きて書生を教へ、多く門生を養ひ、他日の羽翼を作るべしと<sup>134</sup>」。同じ来歴の福地に対する進言は、自身の去就についての判断でもあったろう。徳川家の臣籍を経た以上は、たとえ陪臣上りでも「幕府の遺臣」に他ならず、「朝廷の枢機を専有する」討幕雄藩出身の者にとっては旧敵もしくは屈服者にあたる。官途に就くなら、そうした属性は「牛後に居るに過ぎ」ぬ尻すぼみの先行きにつながろう。であるなら、むしろ「塾を開き書生を教へ」る別途の歩みを選ぶべきである。福沢は、かゝる斟酌の中からその選択を行なってもいたのである。「牛後に居るに過ぎ」ぬ先行きを嫌う根底には、かつては「幕府の穀威張」への「癩癩」を齎した或る骨太の精神がある。その不羈の内面性こそが、「天下の人心」の「卑屈の気風」を「一掃」しようとする新たな議論のバネとなつたとも言えよう。木村芥舟や栗本鋤雲といった節義を守る旧幕臣への好意も、つまりは同じ所に根を持つ。だが、先行きへの斟酌は、こうした精神を引きずりながらそれだけに尽きぬ実利的配慮から出ている。「幕府の遺臣」であることが、

「公儀え御忠節」と無縁な次元で問題になるとすれば、それは、こうした配慮が計算に入れなければならぬ悪条件としてであった。

福沢の選択は、制度的上昇に対するあらかじめの見切りを以てするものであり、野に流れた旧幕臣もう一方の在り方を告げている。福沢の忠告を受けた福地桜痴が現にそうであったように、かゝる部分は一旦の官界出入を経た者が少なくない。そのことは、一方において幕府に対する忠誠心からの超脱を告げると共に、他方では、先行きの斟酌の個々にバラつきを伴った作動を示している。福地を見るなら、彼は福沢の進言を「理ある」と受けとめており、その斟酌を既に我が物としていた。だが、官途に就いての困難は、実際に体験してみなければ解るまい。彼は政府に出仕して却って「（政府枢機の）諸公の真意は決して藩閥政治を喜べる者に非ざる」との印象を持ち、一度は「此諸公の後に従って以て我才を試んと欲し」たのである。<sup>(15)</sup>とは言え、こうした中にあっても他の活動領域の可能性を見失なつた訳ではなかつた。やがてするジャーナリストへの翻身は、以下の発言に明らかのように、官途での立身の断念を藏しつゝ他の可能性に賭けようとするものであつた。「古人が良相たらずんば良医たれと云へる如く、今日の時勢にては内閣に列せざれば寧ろ新聞の主筆たれと云ふべき者なり。余にして筆を新聞に執らば一般の新聞は必らず其勢力を得ん。余にして記者たらば必らず其地位を高めん」<sup>(16)</sup>。

福地におけると同様の展開は、民業の第一線に立つた渋沢栄一や益田孝、言論と著作に拠つた沼間守一・島田三郎・田口卯吉等にもこれを或る程度見て取れる。<sup>(17)</sup>彼らは幕府に対する忠誠心に格別煩わされることなく官界に入りながら、他の活動分野にそれなりの可能性を見て改めそこに自らの場を設定した。無論、それぞれがその歩みに応じた理念や抱負を保持しながらである。

官界参入の旧幕臣にそこからの途中離脱を考えに入れたリスク保障的な所作があり、こうした動きの中から現に離脱

してゆくものがあつたことは、先に触れた。福地らは、視点を変えれば、まさにその途中離脱者であり、幕府に対する忠誠心を払拭し得た者達の間動向を示している。一方には、権力への過剰な適応を見せた大島圭介がおり、他方には、一貫して権力との距離を保った福沢諭吉がいる。これらを両極としてその間に浮動したのが福地らであつた。

維新より二十数年を経て明治の国家体制がそれなりの確立を見せた時期、全体の社会意識は、「今や封建時代の旧主義は都て勢力を失ふて未だ新主義の之に代るものな<sup>158</sup>」き過渡の呈状を示していた。伝統的な観念は、一連の旧制度破壊によってその存続の基盤を奪われ、確実に終焉に向うかの如くであつた。だが、「文明開化」を以てする新たな価値意識が定着した訳ではない。世代の交代による転換、「封建の治下に生々して今日に残喘を保ち残夢を夢みつゝある輩は、大抵四十才以上五六十の老人なれば、其老壯の代謝を告げ社会の局面全く一新するは今後廿年内外<sup>159</sup>」（いずれも福沢諭吉）を予想させながら、「天下の人心」は或る種の不斉一の中にあつた。

だが、まさにこうした不斉一の中で、権力は「臣民」の造出に本腰を入れ始め、「封建時代の旧主義」を呼び起こすようになつていた。帝国憲法によって恩賜として僅かな権利を保障された国民は、その見返りとして「臣民」と位置づけられ、教育勅語等を通して天皇に忠誠を尽す存在とされた。そして、その忠誠の心を喚起すべく、政府は儒教の徳目や往昔の君臣主従の教えを学校教育に持ち込み、しかも徳富蘇峰の言う「復古主義<sup>160</sup>」を社会の全体に弥漫させていたのである。福沢諭吉は、かゝる社会の右旋回を次のように記し、「今日に至りては当局者と雖も実は其始末に困却するものに非ずや」と皮肉つていた。「近年來の事相を察するに、古学流の説は次第に其声を高め、啻に臣子国民たるの心

得として之を唱ふるのみならず、實際に運動して益々その意味を苛烈にし、苟も己れの信ずる所に反するものは之を乱臣賊子視して、敵なきに敵を求め、……間接に世の安寧を害するもの少なからず<sup>(16)</sup>。

権力による「臣民」の造出——天皇への「忠誠の帰一」は、無論、二〇年代に到って始まったものではない。類似の試みは、その発足当時から繰り返されていた。大久保利通が、大阪遷都を説き、東京遷都を実現させたのは、周知の如く、「一天ノ主ト申シ奉ルモノハ斯ク迄有難キモノ、下蒼生トイヘルモノハ斯ク迄三頼モシキモノト、上一貫天下万人感動涕泣イタシ候程ノ御実行奉リ候事<sup>(17)</sup>」を目指したためであった。天皇の全国巡行が、こうした趣旨に沿って計画実行されもする。だが、かゝる試みは、多くの人々が「封建時代の旧主義」の下で朝廷とはほとんど無縁に生きる現実を前にしていた。農工商は勿論のこと、士は士で以下のような雰囲気その大方としていた。「旧藩の主人、又その本家である徳川家に対しては、忠義を尽くさねばならぬ、少くとも尊敬せねばならぬと云ふ考は、それは強かった。それと同時に、天子にまで及んで教育すれば完全であったが、あまり距離があるので当時はその考が薄かった」（平沼騏一郎<sup>(18)</sup>）。旧制度を破壊して統一国家を打ち建てるためには、そして、そうした中で「忠誠の帰一」をはかるためには、むしろこのような「封建時代の旧主義」が最初に除去されなければならなかった。政府の制度改編が、個人の「自主自由」の勸めを伴って進行する所以であり、木戸孝允当時の目算、「天下一般人民従来の束縛を解き各自由の権をとらせ、朝廷の政自然と独出仕候ときは、終に諸藩も旧藩も守る能わず、隨而朝廷に附和仕候<sup>(19)</sup>」は、そうした逆説的状况を如実に物語っている。

権力による「忠誠の帰一」が「封建時代の旧主義」の注入を伴って本格化するのとは、従って、一方に旧制度の破壊が一応の進行を見せ、他方では自らする「自主自由」の勧めが裏目に出る経験を経てからであった。政府が学校教育の方針を転換して「朝に進歩主義の教師を罷め、暮に村夫子を招きて道德教師と為さしめ<sup>(18)</sup>」る筈に出たのは、民権運動の高揚

を前に国会開設の詔勅を出さざるを得なかつた明治一四年の政変以後である。そして、二〇年代にかけ、「爾來汲々として其方針に向つて動けり」(共に竹越与三郎)<sup>(165)</sup>となつたのである。こうした中で、「忠臣二君に仕へず」式の議論が蒸し返される時、そこには福沢の言うように「今や我国には二君なきが故に、二君に仕へんと欲するも得べからず」<sup>(166)</sup>の現実があった。福沢は続けて「唯其節操を移して内外国の關係に適用す可きのみ。是れは別段のこととして、其以外に之に類するものある可きや」と語り、揶揄を込めてその蒸し返しに疑問を呈する。しかし、事が△忠誠の婦一▽のため

の伝統的觀念の呼び起こしであつたことは明らかだろ。前節で見た天皇「同仁一視」の演出は、まさにかゝる呼び起こしと一対をなす。そして、尊皇篤きが故に天皇の側近しという距離設定の法が、その一対の間の水路づけ、婦一の方向を権力に収斂せしめるそれに他ならなかつた。

こうした展開は、その反面において「敵なきに敵を求め」る厳しい異端狩りを付随していた。山路愛山は、その『現代日本教会史論』で、内村鑑三の不敬事件に象徴されるキリスト者達の相次ぐ受難を伝えている。<sup>(167)</sup>蘇峰の言う「復古主義」とは、福沢の語る「極端論の流行」、「君に忠ならざるものは即ち不忠なり、国を愛せざるものは即ち国を害するものなり云々」と、極端より極端に走りて是非黑白を争ふ<sup>(168)</sup>形をとつており、「乱臣賊子夷狄禽獸の文字」が随所に踊り舞う状況を齎していた。

では、その種の貶斥に長く苦しめられてきた旧幕臣の反応はどうであつたか。改革派の後身について言えば、伝統的觀念の呼び起こしを以てする△忠誠の婦一▽に対しては、「主家に忠」の「私情」を保持し続けた者程、これに冷やかであつた。それは、必ずしも維新後の去就の如何を問わない。こうした部分は、却つて政治の公的原理を踏えて、過度の尊皇論議に一矢を報いていた。勝海舟は、晩年の放言癖そのまゝに「人民を離れて尊皇を説くのは、そもそも未だわい」と嘆じて見せ、殊更承久の乱鎮匠の立役者北条泰時を持ち上げていた。<sup>(169)</sup>又、栗本鋤雲は、いかにも彼らしく、「罪

を聖明に獲る」を厭わぬ「鎌府以降六百歳、武門心受之秘訣」を押し出し、老中松平定信のその種の事蹟を伝える中で以下のように語っていた。「越中守が此度の決意は唯々偏へに天下万世の爲めに、倫理綱常を立て貫くの一路に出でたるなれば、仮令一時恐多も上天子の勅慮に逆い奉り、下將軍の威敵に忤ふは、人臣として為し難き限りに在れど、是を知りながら断行せしは、実に徳川一代の名譽なりと称す可し」<sup>(17)</sup>。

無論、尊皇の大義名分への迎合がなかった訳ではない。官界参入の一部においては、むしろその翻身に合せてかなり早くから顕在化していた。脱走抗戦に破れた大鳥圭介が、処分待ちの獄中において逸速く「誰ぞ丹忠を以て万乗を輔くるや」と詠じていたことは、既に前章で見た通りである。立身の願望の前に、「幕府に忠節」はあっさり「万乗」への「丹忠」に席を譲ったのである。「戊辰の瓦解」から八年を経て、彼と藤沢次謙とが呼びかけた旧幕臣旧交の宴席の案内状には「今や幸ニ生ヲ隆治ノ世ニ全シ、況ヤ又居ヲ皇都ノ中ニ同フス。豈聖明ノ余沢ニ因ラザルヲ得ンヤ」<sup>(18)</sup>と記されてもいた。ほど同じ時期、福沢がかゝる動きを「志士の一軀身」と捉え、「此景況を見れば、徳川滅亡の時に死んだ奴等こそ無分別と云ふべきか、少々気の毒なるが如し」とまぜっ返したのも、決して故なしとしない<sup>(19)</sup>。

だが、こうした迎合は、必ずしも尊皇論半面の「乱臣賊子」貶斥を受け入れさせるものではなかった。少なくとも、自身に直接係わる限りにおいては、そうだった。榎本武揚が寄せた鳥羽伏見戦幕軍戦死者追悼の祭文は、先にその一部を引いた。当時から既に三〇年を経たその文章の末尾には、「諸君にして靈あらば、この四海一家の運に際し、一時毀誉の雲散霧消せるを欣び、幸に破顔一笑、以て吾輩不腆の饗を享けよ」とあり、全体の基調は「同仁一視の昭代に遭遇し」て復権を得たことを慰めとするものだった<sup>(20)</sup>。だが、それにも拘らず、やはり「賊徒と罵られ、朝敵と嘲られ」たとへの怒りは鮮烈であり、その貶斥が人勝てば官軍、式のものにすぎないことを、「成敗の在る処功罪の判るゝ所となりて」と明言して憚らなかつたのである。

「乱臣賊子」流の貶斥に対する批判は、野に屹立して「文明の理念」に従った者からより一般論に近い形で提起されてもいた。維新の功労者の幾人かが士族反乱に斃れて「賊徒」とされ、遂に西郷隆盛までもがその轍を踏んだ時、福沢諭吉が『丁丑公論』を記して彼を弁護し、ひそかに「大義名分を弁ぜざるの罪」の虚妄性を突いていたことは、良く知られている。福沢のこうした姿勢は、同時に又成島柳北のそれでもあり、彼もほぼ同じ時期に『論賊称』を著わしていた。福沢は、当時の言論抑圧の状況を前にしてその論を稿本のまゝにとどめおいたが、柳北は、『蕩潭叢談』という諧謔のミニコミ誌を借りて、しかも「冥々ノ中ニ勸懲スル」独特のレトリックに隠れて、己れの言わんとする事を伝えようとした。『論賊称』の論調は、「政府ニ抗敵シテ干戈ヲ興ス者」を「賊」と見て、「乱臣賊子」流の貶斥に同調するかの如くである。たゞ、その貶斥の立場に立って過去を振り返れば、大政奉還以前の幕府に抗敵した者も「賊」に他ならず、彼らが現今「義士」「忠士」と称せられるのは不可思議であるとする。故意に「旧幕の余習」を匂わせて、名分的な貶斥のパラドックスを突いたのである。そして、こうした議論の進め方の中で、思う所を小出しにし、「賊」であるか否かは、「其ノ志節ノ善ミス可キト否トニ」全く関係がないこと、政府に抗敵すれば即「賊」であり、その場合「政府ノ曲直ハ之ニ関セザル」(傍点は柳北)ものであること等を指摘した。これらは、福沢が『丁丑公論』で行なった名分論批判、「今の所謂大義名分なるものは、唯黙して政府の命に従ふに在るのみ。一身の品行は破廉恥の甚しき者にして、よく政府の命する所に従ひ其嗾する所に赴て、以て大義名分を全うす可し。故に大義名分は以て身の品行を測るの器とするに足らず」<sup>(17)</sup>に、ほぼそのまま重なる。尊皇を説き、「朝敵」「賊徒」を口にするには、彼らにとって「唯ダ其ノ時ト勢トヲ膽テ其毀誉ヲ為」<sup>(18)</sup>(柳北)すにすぎなかった。

旧幕臣は、権力による「臣民」の造出の正面切った対立者であった訳ではない。明治も二〇年を経れば、彼らはもはや忘れられかけた昔時の「賊徒」であり、前節で述べたように、むしろ天皇「同仁一視」の演出の中でその復権がはか

られる存在に他ならなかった。いわば、こうした体制内化の措置の中で、個々がその越し方からくる批判や不満を洩らすだけであったと言えよう。だが、その批判や不満を抱えこんでいた事実が、正面切った対立者ではなかったにしろ、統合の枠外により多く踏みとどまる周辺者であったことを物語っている。権力による復権に自足せず、これを好機として独自に幕府幕末の事蹟の伝達に乗り出したことが、そうした有り様には、正確に対応している。詳細は既に紹介した。権力やそれに近い側から「官賊」の筆法を以て歴史が編まれてゆく中、彼らはその作業を如何にも作り事然と見せるかのように、遙かに着実な実証の姿勢を示し、しかも事の意味づけを国家の独立や統一あるいは西洋化等に求めていたのである。佐幕派尊皇論とも言うべき記述がなかったのではないが、それはむしろ少数派にとどまる。

ただ、彼らが過去の伝達と解釈とによって「忠誠の婦」の枠外にいる証しを立てた時は、「老壯の代謝」がその身に直にふりかかってくる時でもあった。栗本が一〇年代末にもはや「知人多逝」<sup>(179)</sup>を語らざるを得なかったように、彼らの変転の生も終幕近くにさしかかっていた。その亡き後、統合の枠外には空席が目立ち、体制の異端や対抗者の緩衝ゾーンは希薄になりゆくばかりであった。

- (1) (明治二年一月)『大久保利通文書』第三卷三二～三三頁。
- (2) 岩倉具視宛書翰(明治二年八月)同前 二五八頁。
- (3) 『木戸孝允日記』(日本史籍協会、昭和七～八年)第一卷一六〇頁。
- (4) 『木戸孝允日記』第二卷七二頁。
- (5) 桂右衛門宛書翰(明治二年七月)『大西郷全集』第二卷四五三～四五四頁。
- (6) 円城寺清『大隈伯昔日譚』(新潮社、大正三年)三二三～三三四頁。
- (7) 「日記」『勝海舟全集』第二一巻五一六頁。

- (8) 「水川清話」『勝海舟全集』第一四卷二〇六頁。
- (9) 「海舟秘記」『勝海舟全集』第二一巻五四六頁。
- (10) 「日記」『勝海舟全集』第一八巻三五二頁。
- (11) 「日記」『勝海舟全集』第一九巻二五頁。
- (12) 同前 二一九頁。
- (13) 言うところの「微意」が、後に見る退隱の意志であつた可能性もある。たゞ、そうだとにしても、以下の行論に述べるように、復権の意欲は鮮明である。
- (14) 前節参照。
- (15) 「日記」『勝海舟全集』第一九巻三八二頁・三八四頁。
- (16) 同前 三八五頁・三八七頁。
- (17) 同前 三九六頁・三九七頁。
- (18) 「日記」『勝海舟全集』第二一巻一二五頁。
- (19) 同前 二〇二頁。
- (20) 明治一〇年九月の「日記」には、以下の記載が見える。「奥村二等中警視、新納二男へ金子遣わし候事調べとして来る。同人、実は海軍省医官石上嘉右衛門倅にて倭諂の者、鹿兒島に久しく居り候由、小拙を欺きたる者か。午後奥村方へ行く、不在」(『勝海舟全集』第二〇巻一五三頁)。この事件を機として、度々の事情聴取があり、翌明治一一年の末には、日記・書翰等の警察庁差し出しとなる(同前 二二一〜二二三頁)。西郷隆盛との従来からの交流もあり、鹿兒島不穩の風聞が広まり始めた頃からは、「日記」の記載にもそれなりに気を配っていた風が見られる。殊更無関心をよそおうかのように、この時期は身辺雑事ばかりが書き綴られている。
- (21) 「海舟秘記」『勝海舟全集』第二一巻五四八頁。
- (22) 福沢諭吉「瘡我慢の説」『福沢諭吉全集』第六巻五六四頁。
- (23) (24) (25) 「飛川歌集」『勝海舟全集』第一四巻三一五頁。
- (26) 「日記」『勝海舟全集』第一九巻六二〜六三頁。
- (27) (28) 『大君の都』下巻一四五頁。

- (29) 「水川清話」『勝海舟全集』第一四卷三一頁。
- (30) 「海舟秘記」『勝海舟全集』第二一巻五四八頁。
- (31) 「日記」『勝海舟全集』第一九巻三五五頁。
- (32) 「海舟座談」『勝海舟全集』第一一巻四二頁。
- (33) 「瘠我慢の説」前掲書五六六頁。
- (34) 「木村芥舟自書履歴略記」『江戸』第三巻第四号七二頁。
- (35) 「門人犬養毅謹記」の「栗本勳雲先生伝略」は、「瓦解」時にフランスにあつた栗本の次のようなエピソードを伝えている。「変報の巴里に至るや、メルメデ・カション及レオン・ロニー、密に先生に説くに、私人を備ひ薩長を討伐する事を以てし、且つ曰ふ、兵員夥多を要せず、唯軍艦六艘及運漕船若干あれば足れり、其軍需経費の如きは都へて糧に敵に抛るべしと。先生克復の志甚だ切なりと雖も、其外兵を率ひて、我國境を汚さしむるに忍びず、遂に固く之を拒みて帰朝す」(『匏庵遺稿』八二頁)。
- (36) 前節参照。引用文についても同じ。
- (37) 「匏庵十種・序」『匏庵遺稿』七〇頁。
- (38) 「笑嶋樓筆談」『旧幕府』第二巻第三号一二頁。
- (39) 以下に引く『時事新報』掲載の一文は、逆に福沢の側からする木村への肩入れであつたらう。「咸臨丸の艦長としてサンフランシスコへ航したる前の軍艦奉行木村撰津守の如きは、今は木村芥舟と称して都下に風月を楽しみ世塵の外に悠々たりと云う。日本人こそ之を忘れたらんなれども、彼岸の米糧に於ては日本開闢以來始めて来航したる人として、彼の国海軍人の社会に知るのみならず、其国史にも撰津守の名は記して消滅せず。如何となれば米国人は日本政府の改革に深く意を留めずして、唯日本の国の進歩に着眼するものなればなり」(『日本国の功勞』『福沢論吉全集』第一二巻一四七頁)。
- 相互に授護し合うその論法は、政府に存在の承認を求めるか、日本人の全体に公正な判断を求めるかで、多少の隔りを示している。とは言え、前提となる評価の基準は、双方とも政府とは区別された「日本国」への「功勞」の如何である。その在り方は、「戦敗者」の境遇に置かれた者達が、自らの復権に乗り出した時の通有のパターンであつた。
- (40) 『匏庵遺稿』『匏庵詩集』一八頁。
- (41) 同前 二五頁。

(42) 「明治の新政府における旧幕臣の去就」『津田左右吉全集』第八卷二八八頁。栗本に親炙した藤田茂吉は、「子の取る所は……戊辰崩折以後、高踏遠引以て臣節を全ふしたるに在り」とした上で、「嗟是れ旗本八万士人の竟に為才能はざる所、而して有能の士の最も能くし難き所にして、先生独り之を為したる者にあらずや」と述べている(『漫録の序』『匏庵遺稿』七一頁)。周匝に「最も能くし難き所」と見られた韜晦に拠ることが、内に葛藤を抱えつゝの過度な執着ぶりにつながっていたのである。

(43) 『勝海舟全集』第二〇巻九一頁。

(44) 同 前 九七頁。

(45) 『福沢論吉全集』第六巻五五七頁。

(46) 石河幹明『福沢論吉伝』(岩波書店、昭和七年)第一巻七三二頁。

(47) 「笑鷗樓筆談」前掲書第二巻第一号二二～二三頁。

(48) 『福沢論吉全集』第六巻五七一頁。

(49) 『蘭学の家・桂川の人々』最終篇Ⅴ』一四七頁。

(50) 『匏庵遺稿』『匏庵詩集』一七～一八頁。

(51) (54) 「箱館叢記」『匏庵遺稿』三五九～三六一頁。

(52) 同 前 三六五～三六六頁。

(53) 「養蠶起原」『匏庵遺稿』三八六～三八七頁。

(55) 家族宛書翰(文久三年四月)小松緑『伊藤公全集』(昭和出版社、昭和三年)第一巻書翰の部一二八頁。

(56) 『伊藤公全集』第三巻直話の部一四七～一五一頁参照。

(57) 同 前 逸話の部一七八～一七九頁。

(58) 『伊藤公全集』第二巻學術演説の部七一～七二頁。

(59) 『鴻爪痕』『追懷録』二〇頁。

(60) 本稿第二章第二節参照。

(61) 第一巻六一頁。

(62) 島内登志衛『谷干城遺稿』(靖献社、明治四五年)上巻一八〇頁。

- (63) 『谷干城遺稿』下巻三九頁。
- (64) (65) 『谷干城遺稿』上巻二二七頁。
- (66) 『伊藤公全集』第三卷逸話の部一七九頁。なお、これ迄に見た伊藤博文像は、松沢弘陽「伊藤博文」『権力の思想 現代日本思想大系10』（筑摩書房、昭和四〇年）の分析に多くを負っている。
- (67) 『谷干城遺稿』下巻一〇九三頁。
- (68) 同前 一〇八三頁。
- (69) 同前 一〇九一頁。
- (70) 『谷干城遺稿』上巻二二六頁。
- (71) 升味準之輔『日本政党史論』第一巻一五七頁。
- (72) 第二号（明治一〇年一月）二二三頁。
- (73) (74) 『蘭学の家・桂川の人々』最終篇V』六三七〜六三八頁。
- (75) (明治三年三月一六日)『資料 榎本武揚』二七二頁。
- (76) 『大鳥圭介伝』二〇四頁参照。
- (77) (79) 家族宛書翰（明治元年一月）『資料 榎本武揚』二七〇頁。
- (78) 後年になってからは、次のように回想される。「あれは全く自分の考へ違ひから起った事で、当時自分は西洋から帰って間もない時であったから精しく事情に通じて居なかつたので、何でも之れは一番幕府を助けねばならぬと思つて朝廷に敵対したのだ。今日となり、当時の事を思へば、実に馬鹿らしいやうな気もする」(一戸隆次郎『榎本武揚子』一二三頁)。
- (80) 姉宛書翰（明治三年一〇月）『資料 榎本武揚』二七七頁。この種の自信を背景に、当時売り出し中で、榎本の釈放運動に係わつてゐた福沢諭吉に対しても、「福沢の不見識には驚入申候。……是位之見識之学者にても百人余之弟子ありとは、我邦未だ開化文明之届かぬ事知るべし」(同前二七八頁)といった反応を示していた。
- (81) 同前 二七七頁。
- (82) 『榎本武揚子』一一七〜八頁参照。
- (83) 妻宛書翰（明治九年六月）『資料 榎本武揚』二九〇頁。

- (84) 妻宛書翰（明治一〇年五月）『資料 榎本武揚』二九二頁。
- (85) 山内提雲宛書翰（明治九年五月）井黒弥太郎『榎本武揚伝』三三三頁。
- (86) 山内提雲宛書翰（明治九年一月）同前 三一―頁。
- (87) 『資料 榎本武揚』二九九頁参照。
- (88) 『榎本武揚伝』三九〇～三九一頁・四〇八頁、林董『後は昔の記他』（平凡社東洋文庫版、昭和四五年）六六～六七頁等参照。又、『榎本武揚子』一〇八頁も同様の事例を伝えている。
- (89) 『回天艦長 甲賀源吾伝』一四二～一四四頁。
- (90) 『榎本武揚伝』三八三～三八四頁参照。正確な所は捕捉し難いが、薩摩閥との軋轢によって辞任に追い込まれたらしい。官界での立身が黒田清隆の引きによっていたことは良く知られているが、彼を成員とする郷党閥との揉め事は即座に降格人事につながったのである。「薩摩邸に行つた時ばかり、胸に一物あつて、酔つたことがなかつた」（『榎本武揚子』七六頁）と語られるのも、かゝる経験の中で多くの屈辱を強いられたためであろう。
- (92) 『大島圭介伝』二七九頁。
- (93) (94) 同前 三八〇～三八一頁。
- (95) 同前 二八九頁。
- (96) 本稿第二章第二節参照。
- (97) 『榎本武揚伝』二四二～二四六頁参照。
- (98) 明治一四年五月九日雜報欄。なお、右参照のこと。
- (99) 『資料 榎本武揚』二八九～二九一頁・三〇二頁、加茂儀一『榎本武揚』二三二～二三四頁等参照。「ブライフェット・カピタルにて従事致度事」の志望は、彼にあつて後々まで鮮明である（『榎本武揚伝』三三五頁）。
- (100)・(101) 前田愛『成島柳北』一六四～一六七頁所収。なお、大田原在文『十大先覚記者伝』（大阪毎日新聞社、大正十五年）には、柳北が主戦論者であつた旨記されている（六六～六七頁）。
- (102) 後の事になるが、西南戦争に際しても「同胞相喰」むことへの悲しみを語つていた（『血ノ涙』『朝野新聞』明治一〇年三月一日）。

- (103) 「航薇日記」『明治文学全集四 成島柳北 服部撫松 栗本鋤雲集』一一五頁。
- (104) 同前 九六頁。
- (105) 同前 一〇二頁。
- (106) 「瀨上隠士伝」大橋新太郎『柳北全集』（博文館文芸倶楽部臨時増刊号、明治三〇年）二頁。
- (107) 「柳橋新誌第二篇」『成島柳北 服部撫松 栗本鋤雲集』二七頁。
- (108) 「病床ノ失敗」島復三郎『柳北遺稿』（博文館、明治二五年）下卷六三頁。
- (109) 「江湖ノ諸君ニ謝ス」同前 二三三頁。
- (110) 「松菊莊記」『柳北全集』二八五頁。
- (111) 昭和女子大学近代文学研究室『近代文学研究叢書第一卷』（光葉会、昭和三十一年）一八二頁所収。
- (112) 「我邦ノ頑固党ニ告グ」『朝野新聞』明治一五年四月二十九日。
- (113) 「自カラ閑人ト称スルモ、商店ノ主人トナリ、学校ノ教師トナリ、新聞ノ社長トナリ、一日モ安息スルノ暇無キ」〔病床ノ失敗〕前掲書六二頁）が、維新以後の足跡であった。
- (114) 無題『朝野新聞』明治七年一月九日。
- (115) 「時間ト努力」『朝野新聞』明治一一年一〇月三〇日。
- (116) 「潤筆条例」『柳北遺稿』下卷二六～二八頁。
- (117) 「熱海文藪——菜槽余滴」『成島柳北 服部撫松 栗本鋤雲集』八〇頁。
- (118) 「餅屋ハ餅屋」『朝野新聞』明治一二年九月二二日。
- (119) 「大安売」『朝野新聞』明治一一年二月八日。
- (120) 「時間ト努力」前掲紙。
- (121) 「貧ヲ是トスル主義ヲ駁ス」『朝野新聞』明治一三年一月二〇日。
- (122) 注(11)に同じ。
- (123) 「答客問」『朝野新聞』明治九年九月一九日。
- (124) 「私開化」『朝野新聞』明治一〇年一〇月二八日。

- (125) 「難ノ為メニ宛ヲ訴フ」『朝野新聞』明治一五年三月五日。
- (126) 「大迷惑」『朝野新聞』明治一〇年三月一日。
- (127) 「自立ノ忠告」『朝野新聞』明治一〇年六月二三日。なお、「独立自主ノ尊像」『朝野新聞』明治一〇年六月三〇日も併せ参照。
- (128) 「虚名去ル可シ」『朝野新聞』明治一〇年六月九日。
- (129) 前田愛『成島柳北』二二九～二四五頁参照。
- (130) 「迷惑ナ閨」『朝野新聞』明治一〇年一日二三日。
- (131) 論説『朝野新聞』明治一〇年五月四日、「筆能ク人ヲ生殺ス」『朝野新聞』明治一〇年一〇月九日等参照。
- (132) 「思ヒキヤ」『朝野新聞』明治一三年七月二八日。
- (133) 『朝野新聞』明治一三年二月二五日。
- (134) 「既往ヲ捨テ将来ニ望ム」『朝野新聞』明治一四年八月二三日。
- (135) 「熱海文藪——烟草の吸さし」『成島柳北 服部撫松 栗本鋤雲集』五六頁。
- (136) 「贅人ノ贅語」『柳北遺稿』下卷四二頁。
- (137) 「我邦ノ頑固党ニ告グ」前掲紙。
- (138) たゞし、「無用の人」を称する柳北は、決して生真面目な理論と実践の人であつたのではない。その言説の本領は、むしろ江戸の文人の感性を随所に織りまぜた巧みな諷刺や諧謔にあつた。又、日常の行動も、こうした特性とバラレルに、遊興に富む「一張一弛」のものであつた。とは言え、かゝる有り様が「主義」なき浮遊を少しも意味しないこと、行論で見た通りである。
- (139) 「福翁百話」『福沢論吉全集』第六卷三八二～三八三頁。「民情一新」『福沢論吉全集』第五卷一七頁参照。
- (140) 「桃源記者」『朝野新聞』明治一五年一月一七日。
- (141) 行論中の引用は、主に『学問のすゝめ』第四篇「学者の職分を論ず」に拠る。
- (142) 『時事新報』掲載の以下の表題の議論は、なべてそうしたものであつた。「拝借論」「日本工商の前途如何」(『福沢論吉全集』第一卷)「後進の士人は安心の地位を択ぶ可し」「学問の所得を活用するは何れの地位に於てす可きや」「素町人の地位取て代はる可し」「私権論」「立国の脊骨」(『福沢論吉全集』第一卷)「尚商立国論」「民間の政熱退かざるを如何せん」(『福沢論吉全集』第一二卷)等々。

- (143) 彼は、民権運動が一旦の衰退に向う中で次のように語り始める。「方今我國の論者は、兎角内国政治上の事のみ忙がわしく、世上に公にするの著書翻訳の如きも、単に政府人民の關係より民権自由權利義務を論ずるものに止まりて、其日本人をして世界の形勢に通ぜしめ、大に國權擴張を望むの念慮を起さしむべき事に就て論述したるものに至りては、実に暁天の星の如し」(『外交の思想養成せざる可らず』『福沢論吉全集』第九卷九〇頁)。こうした「國權擴張」論への接近が、一方では、周知の「脱亜入欧」論となり、他方では、「何は擬置き日本人と名のある者は、相互に和して國を守らざる可らず」の「官民の調和論」(『官民調和論』『福沢論吉全集』第一一巻四一三頁)となった。
- (144) 『江原素之先生伝』逸話の部五〇頁。
- (145) 同 前 講演の部五六頁。
- (146) 『福翁自伝』(講談社文庫版) 二七三頁。
- (147) 「御時務の儀に付申上候書付」『福沢論吉全集』第二〇巻五頁。
- (148) 「長州再征に関する建白書」同 前 七頁。
- (149) 『福翁自伝』一七四頁。
- (150) 同 前 一七〇頁。
- (151) (152) 山口良藏宛書翰(明治元年六月)『福沢論吉全集』第一七卷五五〇五六頁。
- (153) 山口良藏宛書翰(明治元年閏四月)同 前 五二頁。
- (154) 「旧友福沢論吉君を哭す」『明治文学全集』一 福地椋痴集』四〇四頁。
- (155) (156) 「新聞紙実歴」同 前 三二七〇三二九頁。
- (157) 彼らについては、前節での言及およびその(注)を各参照。
- (158) 「貧富論」『福沢論吉全集』第一三卷八一頁。
- (159) 「封建の残夢未だ醒めず」『福沢論吉全集』第一二卷六〇七頁。
- (160) 「新日本の青年」『明治文学全集』三四 徳富蘇峰集』一三五頁。
- (161) 「教育方針変化の結果」『福沢論吉全集』第一三卷五七六〇五七七頁。
- (162) 『大久保利通文書』第二卷一九二頁。

- (163) 平沼騏一郎回顧録編纂委員会『平沼騏一郎回顧録』（昭和三〇年）一三頁。
- (164) 三条実美宛書翰（明治三年八月）『木戸孝允文書』第四卷一〇四頁。
- (165) (166) 「新日本史」『明治文学全集七七 明治史論集（一）』一六八頁。
- (167) 「政治上は唯主義あるのみ」『福沢諭吉全集』第一二巻七一頁。
- (168) 『日本の名著四〇 徳富蘇峰・山路愛山』四一一～四一四頁。
- (169) 「教育方針変化の結果」前掲書五七六頁。
- (170) 「氷川清話」『勝海舟全集』第一四巻一四〇頁・一一二頁。
- (171) 『砲庵遺稿』『砲庵詩集』七五頁。
- (172) 「白川菜翁侯の断決」『砲庵遺稿』二〇八～二〇九頁。
- (173) 『朝野新聞』明治九年一月二三日。
- (174) 「丁丑公論」『福沢諭吉全集』第六巻五四一頁。
- (175) 『回天艦長 甲賀源吾伝』一四二～一四四頁。
- (176) 『渤海叢談』第一号八～一〇頁。
- (177) 前掲書五三五頁。
- (178) 「蝶々呶々」『朝野新聞』明治一〇年一月一五日。
- (179) 『砲庵遺稿』五八〇頁。

## おわりに

本稿をとりまとめる動機は、「戊辰の瓦解」を経た旧幕臣の言動に心魅かれたためであった。下地は、丸山真男『忠誠と反逆』への感動にあったように思う。感動の質は、学問的なそれよりもむしろ文学的な興奮に近かった。勝海舟の

依怙地さをひめた伝法ぶりや栗本鋤雲の剛毅さの中に一点の泣き所を抱えた姿、成島柳北のどこかぼんぼん風の突張り  
が、そうした質の感動にじっくりきた。

どういう視点から対象に接近するかは、従って、最初からはっきりしていた。たゞ、忠誠の観念に的を絞った時、旧  
幕臣、殊にその覚醒の部分においては、明らかに意識的な選択がなされているように思われた。「主家に忠」の思いが  
だら／＼と続く中に「旧朝の遺臣」であつたのではない。一旦の断絶を介した上で、或る種の決断として「遺臣」であ  
つたのだ。そういう印象が強かつた。

何故、かゝる決断をしなければならなかつたのか。そう考えた時、一人／＼がその越し方に応じて決着をつけなけれ  
ばならなかつた精神の負債に行き当たつた。勝を例にとれば、幕府の崩壊に手を貸した時点から、それに見合う心の債  
務を「主家」に負つたように感じられた。事志と違つてその崩壊を傍観するしかなかつた栗本も、そして又「狂痴」に  
沈んだ柳北も、結局は同じことではなかつたか。このように見るなら、脱走抗戦して生き残つた者のどことなくの身軽  
さも解釈がつく。一度は生命を賭することによつて、負債の大方は返済し得た筈である。

だが、精神の負債といつたきれいな事だけですべてが割り切れる訳もない。やはり、「主家に忠」の観念が、個々にど  
のようなものとしてあつたかが、ポイントになるだろう。その場合、幕府の崩壊に直面しての一時的な昂揚は、留保し  
て考える必要がある。重要なのは、むしろ一旦の断絶の印象を禁じ得ない、それ以前の忠誠観念の在り方だろう。こう  
した経緯を辿つて、本稿の論及の範囲は、幕末の変動過程にまで広がつた。

幕末にまで視野を適及させた時、忠誠観念の克服やもはや殊更の克服を要さぬ空洞化の相が浮び上がつてきた。だが、  
視野の拡大は、新たな疑問と別次元の興味の始まりでもあつた。対抗の勢力であつた討幕派における展開と、事はどれ  
程の隔りがあるのか。こうした疑問は禁じ得なかつた。又、背景には、幕府の改革動向があり、その動きの思いの外の

ダイナミズムが興味深く思われもした。思いの外のダイナミズムとは、幕府の状況適応が内に疎通の体制への漸次的転換を伴って社会全般の流動化とリンクしてゆく様を言う。壮年の開明的人材群が権力の中核近くに昇り、知識や実務志向の青年達が各地から参集するようになっていた。最初に心魅かれた人々を含めて、維新の変革の下では以外に多くの旧幕臣が社会的な進出を見せている。その有り様が、かゝる動きによって或る程度得心させられた。触れない訳にはいかないと考えた。

叙述の輪郭が、以上を経て定まった。幕政改革の展開に合わせて上昇もしくは参集した部分を大きく改革派と概括し、彼らの勢力形成・拡大と分裂・維新後の翻身の過程を追うことにした。そして、これと並行して、その内面を忠誠観念の変容という観点から跡づけた。内面の跡づけにおいては、敢えて対抗勢力との比較を以てした。

関心の広がりによって任せたためであろう、結果として振り返れば、余計な議論がかなり多く、そのことが全体のバランスを失なわせている。それだけならまだいいが、余計な議論の多い反面では、触れるべき幾つかのことが言及されていない。例えば不器用の値について、もっと語るべきであったように思う。

結城無二三という人がいる。徳富蘆花の小説『黒潮』の主人公東三郎のモデルとされる。既に触れたように、幕末においては新選組の成員とほぼ同質の佐幕派浪士であった。社会全般の状況化を好機として「一国一城の主」を目指した点で、在り方は、尊攘派の裾野部分にも通ずる政治短絡型の流動分子であった。その特性は、維新後も基本的に変りない。しばらくの間は、騷擾の風聞を耳にする毎に血をさわがせ、時にすべてを放り投げて駆けついたりもした。官界に縁がなかったの言うまでもない。その野心と行動力とが一時の開花を見せたのは、外人宣教師への個人的な帰服によってキリスト教徒になった時であった。偏見と迫害に抗しての初期伝道において、状況化の中でこそ生き／＼とするその特性が発揮された。静岡での布教の先兵として大いに衆望を集めたと言う。だが、その彼も、伝道の進捗に伴う教派

の組織化の中ではじき出されてしまう。時期的には鹿鳴館に象徴される欧化主義の時代、キリスト教が東の間の隆盛に酔い、体制内化することの有難味を知った頃であった。以後、彼はたゞ食うためだけの下積み生活に沈んでいく。

こうした不器用の事例が告げることが多い。特に、明治においての在野の活動領域の意味を再認識させてくれる。在野が在野として創造と反骨のエネルギーに満ちていたのは、かゝる不器用の部分がそれなりに所を得て散在していたためではなかったか。そして、その余地のなくなった時は、△野▽が△朝▽に対する対抗の契機を失ない、たゞの△民間▽に、しかも内にエスタブリッシュメントを抱え込んだそれに納りかえるプロセスではなかったか。これらの点に突込む種々の発掘と議論が、或は必要ではなかったかと考えている。

なお、最後に、本稿が滞りがちの連載となったことを心からお詫びしたい。非力を顧みずに勇み立った結果が、これである。

Reformist Tokugawa Officials during the  
Bakumatsu to Mid-Meiji Era :  
Some Problems of Nation-building  
and Loyalty Shifts (7)

Hisashi KIKUCHI\*

---

Introduction

- I The Genesis of Reform Movement in the Bakufu Government (in Vol. XXIX No. 3 • 4, Vol. XXX No. 4, Vol. XXXI No. 1)
  - II Development of Reform Movement in the Bakufu Government and Differentiation of Factions within it (in Vol. XXXI No. 2, Vol. XXXII No. 1)
  - III The Remnants of the Bakufu Reformists vis-à-vis Nation-building under the Meiji Oligarchy
    - 1. Many Choices of the Remnants of the Bakufu Reformists 1868-1887 (in Vol. XXXII No. 3)
    - 2. Conflicting Ideas of Loyalty and its Settlement among the Remnants of the Bakufu Reformists
- Conclusion (in the present part)

---

In this article, the author treats the Bakufu reformists and the remnants of them in late nineteenth century and tries to analyze their thought and behaviour from the viewpoint of loyalty shifts.

---

In the last part (III-1), the author described the division of the ex-retainer of the Tokugawa, especially of the enlightened part of them

---

\* Assistant, Hokkaido University of Education Kushiro Branch

(the reformists in the past), after the Meiji Restoration. In this part, the author brings their thought into focus.

The loyalty shift from the Tokugawa to Kokoku (the nation state) was clear in the enlightened part. They had become to think more of unifying a nation than of supporting the Tokugawa since the encounter with the Western Powers. But this change did not always mean to sweep the traditional loyalty away. After Meiji Restoration, the ruin of the Tokugawa, some of them kept their distance from the new government for the proof of the old fidelity. Their effort for the nation state appeared in the non-official field. Of course, the majority of the enlightened part made such effort in the official field. Though in this case, several attempts could be found to recover the status of the defeated Tokugawa.

In general, after the ruin of the Tokugawa, the loyalty to that was swept away. It was a natural consequence of the loyalty shifts which had had another aspect. In addition to finding the superior object, the old fidelity itself had become empty with the individuation in the political-social disorder. This change accompanied with the self-centered attitude was clear too in the enlightened part, especially their youngers who were largely of low birth. So, most of them were getting near the new government for the success of themselves and had no concern with the defeated Tokugawa. Even in the non-official field, the selfish choice could be seen that came from the negative forecast of future in the government.